



終末のスピリチュアル
祈りの方法
(契約の祈り
即座に結果を出す

ジョンダニエル

省庁からのその他の書籍

1) 服従（神の権威の経路であり、

神の王国）。

2) 終わりへのキリスト教徒の競争

（王位継承資格）。

3) キリストの影としての仮庵。

著作権 : ジョン・ダニエル牧師

1998年9月

聖書の引用は、公認の欽定訳聖書からのものです。

All rights reserved. 本書のいかなる部分も、著作権者の書面による許可なく、複製、複写、電子的、録音、その他の方法での保存、検索形式への保存は禁じられています。

導入

イエスは弟子たちを選んだ後、何度か彼らと共に出かけ、説教し、祈り、奇跡を起こしました。ある日、弟子の一人がイエスの祈りを見て、静かにイエスのもとに近づき、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください」（ルカ11:1）と言いました。そしてイエスは、一般に主の祈りと呼ばれる祈りを弟子たちに教えました。聖霊が降臨し、私たちに新しい言語で話す能力を与えてくださったことで、イエスが弟子たちに教えられたその祈りはほぼ完了しました。なぜなら、一度異言で祈れば、主の祈りよりもはるかに偉大な祈りを捧げたことになるからです。しかし、無知な信者たち、さらには神の聖職者たちの中にさえ、新しい言語で話すことがすべての信者にとって適切かどうかについて議論している者がいます。使徒パウロが言語の多様性について語っている箇所を私たちは読みます。

また、多くの人は、言語の多様性とは人間の言語と天使の言語のことだけだと信じています。しかし、彼らは無知なので、鳥、動物、魚などがそれぞれ独自の言語を持っていることを知りません。そして、それらを話すことで、彼らも言語の多様性を共有しているので、そこで本書では、神との契約関係にある人々が、これらの言語の多様性を用いてどのように神に語りかけ、即座に答えを得るのかについてお話ししたいと思います。

献身

この本を全能の神に捧げます。神はアブラハムを通して私たちと結ばれた契約のおかげで、神と契約関係にある民に、困ったときにどのように祈り、神に呼びかけるべきかを示していただけでなく、契約における神自身の役割も守ってこられました。また、愛する妻メアリー・ブレッシングス、息子ティモシー（ジュニア）、ベンジャミン、デイビッド、そして神がこの助けと和解の働きにおいて私の下に置いたすべての兄弟たち、そしてキリスト教徒の群れの中とこの世の両方で、どのように祈り、答えを得るかを求めているすべての人々にも捧げます。最後に、この本を私の親友であり、今では主の愛する兄弟であるピーター・チエドゥ・イジェオマに捧げます。彼の多大な経済的支援のおかげで、この本の出版が可能になりました。

神がイエスの御名においてあなたの祈りの願いをすべて叶えてくれますように。
アーメン。

コンテンツ

1 悲しみの中で子供を産む

そして精神的な意義。

2 神の子とは誰ですか

彼らはどうやって生まれるのでしょうか？

3 祈りの神秘

契約を思い出させる祈り。

4 誰がこれらの祈りを捧げるべきか

強力な祈り？

5 神の子たちは遠吠えすることが期待されていますか？

6 咆哮、裁きの部分

御霊によって祈ること。

7 狡猾な女性とは誰ですか。教会における彼女たちの役割は何ですか。

8 7つの戦いの祈り。

9 神が教会に期待していること

今やるべきこと。

1

子どもを産む 悲しみと精神的なもの 意義

この本をよく理解するためには、神が新しいことを行なっていることに注目すべきです。聖書に見当たらないという意味でも、この真理を歩んだディスペンセーションがこれまで存在したことがないという意味で新しいわけではありません。しかし、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨と栄光の到来の前の最後の教会時代であるこの教会時代においては、新しいことなのです。また、黙示録3章14節の最後の行で、主イエス・キリストは使徒ヨハネを通して、ラオデキア教会の使者の特徴の一つとして「神の創造の初め」を語っておられます。これは、神が初めに人類、そして教会に対して行われたことのほとんどが、千年王国時代に入る前の最後の教会時代において、神が新たな働きを始められるこの終わりの時に再び現れることを示しています。預言者イザヤは、「見よ、先のことは既に起こった。そして、わたしは新しいことを告げる。それらが起る前に、わたしはあなたがたに告げる」と述べて、そのことを垣間見ていました。

(イザヤ42:9)イザヤはさらにこう言った。「

昔のことを思い煩い、昔のことを思い煩い、見よ、わたしは新しいことをする。今、それは起こる。あなたたちはそれを知らないだろうか。」（イザヤ43:18-19）イザヤが「昔のこと」と「新しいこと」と呼んだものは、律法の時代以前から存在していた。律法の時代が到来すると、それらは新しいものとなり、教会時代が近づくと、それらは新しいものとなった。

律法時代においては古くて過去のものとなりましたが、教会時代においては新しいものとなりました。主イエス・キリストの初期の弟子たちはそれを実践していましたが、悪魔がローマ人を襲ったとき、それは再び古く埋もれた問題となりました。しかし、聖霊が今も地上で働いている限り、聖霊が真理をよみがえらせることなしに、誰も真理を埋もれることはできません。

だからこそ、この最後の教会時代において、聖霊は御自分の民をエデンの園の始まりへと連れ戻しておられるのです。主はイスラエルの王であった伝道者にこう言わせました。「かつてあったことは、これからもある。かつて行われたことは、これから行われる。太陽の下に新しいものはない。『見よ、これは新しい』と言えるようなものがあるだろうか。それは、私たちの前にあった昔からすでにあっただ」 （伝道の書1:9-10）。

これは説教者の言葉であり、太陽の下に新しいことは何もないこと、これから起こることは既に起こったことを示している。主がこの教会時代に起こして欲しいと願っておられるこれらの出来事のいくつかは、どのようにして見出せるのだろうか。説教者は箴言の中で再び答えを与えている。「神の栄光は事を隠すこと、王の誉れは事を探り出すこと」（箴言25:2）

ここで神の栄光とは神の霊のことであり、王たちは聖徒と呼ばれています。つまり、聖霊こそが御言葉の中に御国の奥義を隠しておられる方であり、それを探求するのは聖徒たちの務めであるということです。どのように探求するのでしょうか？それは、秘密の部屋の鍵を持つ主に私たち自身を完全に委ねることです。そうすれば、主は私たちにそれらを見つける方法を示してくださいます。それを隠しておられるのは主であり、それを明らかにするのも主なのです。

もう一つの要素は、神がこの最後の教会時代に新しいことを啓示しておられる時、この世の知恵に導かれる知識人にとって、神の知恵とこの終末時代の説教の両方を理解することは不可能であるということです。なぜでしょうか？十字架の説教や神の霊に関することは、生まれながらの人間にとっても、愚かにも謙虚になって御霊に関することを受け入れ従うことができない知識人にとっても、愚かなものだからです。パウロ兄弟はこの知性主義の苦い経験をしました。そして、主が彼に出会う前は、この世の多くの知恵を授かっていたパウロは、その知恵を粉々に引き裂き、謙虚にさせ、そして愚かにも神の知恵を彼に授けました。彼がその経験をした後、聖霊は彼を通してこう語りました。「知者はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論者はどこにいる。神はこの世の知恵を愚かにされたではないか。』神の知恵によって世は神を知ることではできなかったが、神は宣教の愚かさによって信じる者を救うことを喜ばれた。ユダヤ人（信者）はしるしを求め、ギリシア人は知恵を求める。しかし、私たちはキリストを宣べ伝える。

十字架につけられて、ユダヤ人（信者）にはつまずき、ギリシア人（不信者や知識人）には愚かなものでした。しかし、召された人々、すなわちユダヤ人にもギリシア人にも、キリストは神の力、神の知恵なのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。兄弟たちよ。あなたがたの召しのことを考えると、肉に従って考えると、賢い人は多くなく、力のある人も多くなく、身分の高い人も多く召されていません。しかし神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれました。神は、この世の卑しい者、見下されている者、無に等しい者を選んで、有るものを無に帰されました。それは、神の前で誰も誇ることがないためです。（1コリント1:20-29）

聖霊はパウロ兄弟を通してこう言われました。「しかし、生まれながらの人は神の霊の賜物を受け入れません。それは彼にとっては愚かなことだからです。また、御霊によって判断されるものであるため、彼はそれを理解することができません。

（1コリント2:14）これは、知識人、重荷を背負った人々、そしてこの世の知恵に富んだ人々が、終末における神の働きを理解し、それに従って歩むためには、自らの知恵を粉々に引き裂かれ、キリストの福音のために世の愚か者とみなされる人々の仲間入りをしなければならぬことを如実に示しています。彼らは自分が何も知らない信じ、それゆえに神の権威の管制下に身を置く必要があります（私の著書『服従、権威の管制』を参照）。

そこで聖霊は彼らに神の知恵と、神の真の高揚を受けるために謙虚になる方法の両方を教えます。

「悲しみのうちに子を産む」という言葉は、一体どういう意味でしょうか。霊的な意味は何でしょうか。「産む」という言葉はヘブライ語で「ヤラド」と発音され、「ヤウラド」と意味され、子供を産む、生む、出産する、生まれる、育てる、分娩する、苦勞する、といった意味があります。また「悲しみ」もヘブライ語で「エツェブ」と発音され、「激痛、悲痛な、労働、苦痛な」といった意味があります。したがって、「悲しみのうちに子を産む」という言葉は、苦勞して産む、苦痛や多くの労働で子供を産む、といった意味になります。この言葉の由来はどのようになったのでしょうか。これは創世記第3章で、神が自らが設立した最も偉大な制度を破壊しようとするサタンを見ていたことに由来します。神は即座に反応し、降りてきてサタン、女、男を呪いました。サタンと女の呪いはこうでした。主なる神は蛇に言われた。「お前はこのようなことをしたので、すべての家畜、すべての野の獣の中で最も呪われる。お前は腹ばいで歩き、一生土を食べなければならない。わたしは、お前と女との間に、お前の子孫と女の子孫との間に敵意を置く。女はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕くであろう。」また、主なる神は女に言われた。「わたしは、お前の苦しみと、お前の妊娠を大いに増やす。お前は苦しみのうちに子を産み、お前の欲望は

あなたの夫となり、彼があなたを支配するであろう。

(創世記3:14-16)

サタンが食べてきた塵は、塵から作られた人間の肉と血であり、また、やはり塵から作られた動物、鳥、魚などの肉と血です。

宇宙の創造主によるこの呪いのせいで、女性たちは出産の苦しみの火の中をくぐり抜けてきました。しかし、主イエス・キリストがカルバリの十字架ですべての呪いを釘付けにされた後、神はわずかな安全と救済の条件を与えてくださいました。その条件はパウロの言葉の中に見出すことができます。「しかし、信仰と愛と聖潔を保ち、慎み深くいるなら、出産の苦しみから救われるであろう」（テモテ第一2章15節）。この聖句は、サタンが常に攻撃を仕掛けたいくなる、出産の激しい痛みを経験する女性に残された唯一の安全の条件を概説しています。そこにかけられた呪いのせいで。しかし、神の慈悲がなければ、子供を産むという苦痛の瞬間を生き延びる女性は一人もいません。なぜなら、サタンは神の律法に従って生み出された子孫が、サタンの頭を砕くことを知っており、それが起こるのを望まないからです。最善の防御は攻撃することであると言われていますが、悪魔はこれを知っており、したがって、女性に自分を粉碎する種子を産ませることによって防御することを望まず、むしろ子宮内の女性とその種子を常に粉碎しようとします。

世界中の信者の大多数は、悪魔が女とその子孫に対して行っているこの戦いが、霊的に大きな意味を持つことを知りませんでした。知識を持っている人の中には、創世記3章15-16節の啓示の知識を持っていないため、それをどのように適用すればよいか分からない人もいます。

神はアダムをエデンの園の支配者に任命した時、アダムが墮落することを知っていました。また、主イエスを遣わしてサタンを奪うことも知っていました。そして、主イエスの来臨が女を通して起こることも知っていました。だからこそ、創世記3章15-16節で神が語られたことは、霊的な洞察に満ちており、神は霊であり、人は神のかたちに造られたので、私たちも霊的な存在であり、死すべき肉体に生きているという事実を気にする必要はないということを証明しています。だからこそ、神ご自身である神の言葉は、文字どおりの意味を理解しようとする前に、まず霊的に理解し、判断されるべきなのです。これらのことを踏まえて、創世記3章15-16節の霊的な意味を見てみましょう。

神の言葉の神聖な意味を歩み始め、受け入れ始めた真の信者は皆、女が教会と呼ばれていることを知っています。そして、肉体的にも霊的にもサタンの頭を砕いた女の最初の子孫は、主イエスです。霊的な意味での女は教会と呼ばれ、教会はペンテコステの日に神の霊の注ぎとともに始まり、よく話題になる携挙によって復活し天に昇るまで続くので、女の二番目で最後の子孫（教会）は、

サタンの頭を砕く者は、男の子の集団、もしくは勝利者のことです（参照：黙示録 12:5,11）。この男の子の集団についてのより明確な教えと、その集団の一員となる資格については、私の著書『終わりまでのクリスチャンの競争（王位への資格）』をご覧ください。サタンの子孫は、反キリストと彼に従う集団です。真の信者（教会）は主の花嫁とみなされ、主ご自身が花婿です。この理解では、真の信者は男女を問わず、霊的に女性とみなされます。聖書にはシオンの娘しか登場せず、シオンの子らについては聖書に一切触れられていないのは、このためです。シオンの子らになれば、もはや花嫁ではありません。なぜなら、イエスはシオン（神の名はシオン）の独り子であるため、主は結婚する花嫁を集めておられ、その花嫁たちが主によってシオンの娘と呼ばれるからです。シオンの娘は皆、女性、あるいは教会であるならば、シオンの娘の子孫とは何でしょうか。シオンの娘、すなわち女性の子孫とは、主イエス、すなわち神が彼女の心に置かれた神の言葉であり、創世記3章16節に従い続ける限り、サタンの頭を砕くのに大いに役立つでしょう。神は女性が悲しみのうちに子供を産むように定められました。これは霊的に、シオンの娘、すなわち真の信者は皆、神の国の子供たちの救いが現れるまでは、絶え間ない断食と祈りによって、苦痛と労苦と苦難に苦しみ、魂を苦しめなければならないことを意味します。これは、あなたがたが口にする単なる言葉ではありません。

祈りを呼びかけたり、単に異言を話したりするとしても、それは肉体と魂の深刻な苦しみであり、それを解き放つ器にとって、陣痛を通して大きな負担となります。それは、妊婦が寝る前にひどい陣痛を経験するのと同じです。牧師の中には、それを信じていると言う人もいますが、声に出して陣痛を経験するわけではありません。彼らは真理を知らないのです。陣痛は祈りであるということを理解していないからです。彼らも異言で、あるいは理解して祈りたいときは、声に出して祈ります。また、新しい赤ちゃんを産もうとする妊婦は陣痛を経験しなければなりません、声に出して陣痛を経験します。では、子供を産もうとしているシオンの娘が、声に出して陣痛を経験しないでいられるでしょうか。聖霊の律法が自然の法則を支配しており、これらすべてのものは霊の領域から始まったことを忘れないでください。

2

神の子とは誰ですか

そして、彼らはどうやって生まれるのでしょうか？

多くのクリスチャンはきつこう尋ねるでしょう。「この人は一体何を言っているんだ？」と。結局のところ、彼らは「新しく生まれた者は皆神の子だ」と言うかもしれませんが。まあ、私は彼らを責めません。なぜなら、彼らの大多数はそう教えられていたからです。預言者ホセアは、イスラエルの民（教会）に、主なる神が彼にはっきりと語った言葉を語らずにはいられませんでした。

わたしの民は知識の欠如によって滅ぼされる。あなたが知識を拒んだので、わたしもあなたを拒み、わたしの祭司とはしない。あなたがあなたの神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子供たちを忘れる。

（ホシヤ4:6）今日、多くのクリスチャンが欺かれています。それは真理を見つけられないからではなく、真理を受け入れる覚悟も、真理を教えることができる神の牧師とその教えを受け入れる覚悟もできていないからです。そのため、彼らは徐々に霊的に死につつありながら、依然として自分は神の子であると主張しています。

洗礼者ヨハネは、世に来る真の光と、神の唯一の子である光について証言するために神によって遣わされた人であり、

父なる神は、多くの子を御自身のもとに起こし、御自身のもとに立たせてくださいました。ヨハネはこう言いました。「しかし、御子を受け入れた者、すなわち、御名を信じた人々には、神の子となる力を与えた。彼らは血によってではなく、肉の欲求によってでもなく、人の意欲によってでもなく、ただ神によって生まれたのである。」（ヨハネ1:12-13）ヨハネは、御子を受け入れ、御名を信じ、神の御心（神の言葉）に従って生まれた人々には、神の子となる力が与えられると言いました。

一体何人のクリスチャンが、真に神の御心に従って生まれているのでしょうか？ 事実、いわゆるクリスチャンの大多数は、神の御心が何であるかさえ知らず、神の御心によって生まれたことなど口にしません。使徒パウロは神との長い交わりした後、神の靈感によってこう語りました。「神の霊に導かれる者は皆、神の子なのです」（ローマ8:14）。神の子は神の子よりも大きな責任を負っていますが、中には無知にも両者を同じものと呼んでいる人もいます。神の子は、主人が何をしているかを全く知らないしもべのような働きをします。（ガラテヤ4:1-2参照）このことから、神の子が行うことのほとんどは、神の完全な御心を完全には知らないため、自分の意志で行われるのです。主イエスご自身も地上におられたとき、このことについて洞察を与えてくださいました。なぜなら、宣教活動を通して、弟子たちを「子供」あるいは「しもべ」と呼んでいたからです。ヨハネ15:12-15で最後の戒めを与えた時、イエスは彼らを友と呼びました。そして、イエスの死後、

復活後、イエスは天に昇る前にペテロに最後の教えを与えた時、こう言われました。「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かったときには、身を固めて、自分の望むところへ歩いていました。しかし、年老いたら、あなたは手を伸ばし、

あなたに帯を締めさせ、あなたが行かざる所に連れて行ってくれるであろう。

イエスは、どのような死を遂げることによって神に栄光をささげるべきかを示して、こう言われた。（ヨハネ21:21:18-19）

主イエス・キリストのこの言葉は、霊的に言えば、ペテロがまだ若いクリスチャン、主にあって幼子であった頃、あるいは幼子であった頃は、ただ自分の意志で行動し、好きなように行動し、行きたいところへ行っていたという意味です。実際、彼は幼子、あるいは幼いクリスチャンとして自分の意志に従って行動していましたが、年老いて（霊的に成熟して）、あるいは成熟した息子となった時、彼は自分自身、あるいは自分の意志を主に委ね、この節で「別の者」と呼ばれている聖霊が、彼（ペテロ）を導き始めるのです。

ペテロは行きたくないし、また行きたくないことをするようにも導かれるでしょう。主はペテロが自分の意志、生き方、考え方、決断などに死なれた時にのみ、神がペテロの行いから栄光を受け始めるということを意味して、このように言われました。なぜでしょう？それは、ペテロが自分の利己的な生き方を捨て、聖霊に導かれ始めることを許す時、彼が何をしようとも、それは彼にとって神の御心となるからです。なぜなら、彼を導くのは神の御霊だからです。使徒パウロは、「私はキリストと共に十字架につけられました。しかし、私は生きています。しかし、私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。そして、私が今生きているこの命は、

肉において、私は神の御子を信じる信仰によって生きているのです。御子は私を愛し、私のためにご自身をお与えになりました。（ガラテヤ2:20）パウロは、自分の意志はキリストと共に十字架につけられたと述べていますが、肉において生きているのは、ご自分のために死んでくださった主イエス・キリストの御心によるのです。使徒パウロが自分の意志を捨て、自分を召してくださった主（主イエス）の御心を行った、ということ以上に、ここで語るべきことがあるでしょうか。

これは息子としての身分であり、成熟の大きな兆候を示しています。
したがって、神の子とは、神の言葉または神の意志に従って生まれた者（ヨハネ1:12-13）、神の霊に導かれる者（ローマ8:14）、霊的な者（コリント第一2:15）、神の戒めを守ることによって神を愛する者です。

神の子たちはどのようにして生まれるのでしょうか？

神の子らは神の霊によって生まれますが、神はその目的のために用意された人間の器を通して受胎を行われます。そして、私がお話したいのは、神が神の子らを受胎させるために用いられるこの人々、そして彼らがどのようにそれを行なうかということです。

これらの器について語るとき、神の呪いを創世記3章16節の女性と比較することが重要です。神は女にこう言われました。「わたしはあなたの苦しみとあなたの妊娠を大いに増やす。あなたは苦しみながら子を産むであろう。」主は弟子たちにこう命じられました。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだ誰も乗ったことのない子ろばが繋がれているのを見つけるでしょう。それを解いて連れて来なさい。」

ここに来なさい。もし誰かがあなた方に、『なぜ彼を解放するのか』と尋ねるなら、——
あなたたちは彼にこう言いなさい。主が彼を必要としておられるからです。
遣わされた者たちは出かけて行って、主が言われたとおりの子を見つけま
した。彼らが子ろばを解いていると、その持ち主たちは言いました。「なぜ
子ろばを解くのですか？」彼らは言いました。「主が彼を必要としておら
れるのです。」彼らは子ろばをイエスのところに連れて行き、自分たちの上
着をその子ろばの上に投げかけ、イエスをその上にお乗せになりました。

(ルカ19:30-35)

靈的に言えば、あなたの向かいの村は闇の王国であり、人が乗ったこと
のない子馬が繋がれているということは、闇の王国に繋がれたまま、改心し
たことのない男女を意味します。もし誰かがあなたに尋ねたら、

サタンが「なぜ彼を解き放つのか」と尋ねた時、彼らは子馬をイエスのもと
に連れてきて、自分たちの着物を子馬の上に投げかけ、イエスをその上
に乗せました。これは、彼らが子馬に救いの福音を伝え、救いの衣を着せ、ま
た子馬に聖霊のバプテスマを施し、イエスとその乗り物に乗れるようにし
たことを意味します。引用と解釈の両方でこの部分に下線を引いたのは、靈
的に主イエスが普通の馬について語っていたのではなく、神の子となる者
たちをまず闇の王国から解き放ち、その後彼らに救いの福音を伝える過程
を示しておられたことを示しています。また、ルカ兄弟は、イエスがパリサイ
人や群衆ではなく、弟子たちに語られたと記録しています。なぜ弟子たち
だったのでしょうか？それは、弟子たちは神の子であるからです。

主への奉仕に全身全霊を捧げる者たち。彼らは、自分たちを遣わした主（主イエス）が、そこで出会うであろう男（サタン）よりもはるかに大きな力を持っていることを知っている者たちです。主イエスと共に働く中で、彼らは火の試練に耐える経験を積んできました。そして、それが、子馬を解こうとする際に悪魔からどんな試練を受けても耐え抜く力となるのです。彼らは、人目を引くことなく（つまり、人からの承認を求めることなく）、子馬を解く方法を知っています。

シオンの娘よ、産みの苦しみを味わう女のように、苦しみに耐え、産みの苦しみを味わいなさい。今、あなたは町を出て野に住み、バビロンへ行くであろう。そこであなたは救われる。主はそこであなたを敵の手から救い出されるであろう。（ミカ4:10）シオンの娘たちは、私たちの主イエス・キリストの真の弟子であり、使徒パウロを通してヘブライ人への手紙13章13節で与えられた「それゆえ、私たちは、彼のそりを負って、陣営の外へ、彼のもとへ出よう」という警告に耳を傾けてきました。彼女たちは、すべての宗教を支配するこの世の組織から完全に離れてきました（私の著書『Christian Race To The End (Qualification for the Throne)』と『Tabernacles As A Shadow of Christ』を参照）。彼らは神の子らの顕現のために重労働をしており、神の子らが生まれるまでは、その苦しみを止めることはできない。彼らは神の子らの苦しみに耐えることができる者たちである。

妊娠と、神の子らを産む苦しみ。

彼女は産みの苦しみを受ける前に子を産み、苦しみの苦しみが来る前に男の子を産んだ。誰がこんなことを聞いただろうか。誰がこんなことを見ただろうか。地は一日で子を産むだろうか。国はたちまち生まれるだろうか。シオンは産みの苦しみを受けると、すぐに子らを産んだのだ。（イザヤ書66:7-8）

この箇所には二重の意味があり、一つ目は霊的な意味、二つ目は物理的な意味です。霊的な意味は、シオンの娘たちを構成する全員が、その日から男の子、すなわち勝利者、あるいは神の子たちを産むために共に苦しみ、産みの苦しみを味わう日が来るということです。私が「共に苦しみを味わう」と言っているのは、神がシオンの娘たちの中に含めようと意図している人々の中には悔い改めない者もいれば、改心した者の中には陣営から離れない者もいるということです。改心した者も離れる者は、それぞれ個別に苦しみ、まだ闇の王国に縛られている者たちを解き放っています。これが、神の子たちの顕現が一時的に遅れる理由です。二つ目は、文字通りの意味です。反キリストとその軍隊がイスラエルを滅ぼすためにエルサレムに進軍するやいなや、イスラエルは国家として降伏し、主イエスを彼らのメシアとして認める日が来るということです。そして、彼らが救われるために苦しみ始めると、彼らの救世主が天の軍勢を率いて到着し、彼らを救い、彼らは彼を主、救世主として受け入れるでしょう。

靈的な男の子の誕生についてのもう一つの言及は、使徒ヨハネが黙示録12章で見たものの中に見出すことができます。

すると、天に大きな不思議が現れた。ひとりの女が太陽と月を足の下にまとい、頭に十二の星の冠をかぶっていた。彼女は身重で、産みの苦しみと出産の苦痛のために叫んでいた。

そして彼女は男の子を産んだ。その子は鉄の杖ですべての国々を支配するはずであった。そしてその子は神のもとに、その御座に引き上げられた（黙示録12:1-2,5）。

この女性は現在、天に記されている長子たちの教会（ヘブライ人への手紙12章23節参照）、この世の宗教制度から完全に離れたシオンの娘たち、そして暫定教会と呼ばれる普遍的な信者たちで構成されています。太陽と月を足元にまといているということは、教会が贖われた男女で満たされていることを意味します。彼女の頭には12の星の冠があり、冠は王権または支配権の印であり、12の星は神の力と権威を意味します。したがって、これは贖われた男女が王または支配者となるための神の力と権威を持っていることを意味します。この女性（教会）は、靈的に、彼女が満ち足りるまで、何世紀もの間妊娠を続け、鉄の杖（聖霊の抵抗できない力）ですべての国々を支配する男の子（神の勝利者または息子たち）を産むために、苦しみの陣痛を始めます。

男の子が引き上げられるとすぐに、女性は

反キリストに押しつぶされることを避けるために、分離へと走る普遍的な信者たちが残されるでしょう。

また、主イエスの弟子である使徒パウロは、ガラテヤの教会のために苦闘し、彼らが改心するまで、悲しみの中での出産を経験しました。そして、神の言葉が彼らの中に形づくられるように（つまり、彼らが成熟した息子として神の霊の導きに従って歩み始めるように）彼らのために苦闘し続けました。

私の幼子たちよ、私はあなたたちのうちにキリスト（神の言葉）が形づくられるまで、再び産みの苦しみを味わっています。（ガラテヤ4:19）

ですから、苦闘を通して神の国の子供が生まれ、苦闘を通して神の言葉の知恵と知識を身につけて、神の霊に導かれる成熟した息子になるのも当然のことです。

使徒ヨハネは福音書16章21節で、この女性の苦しみについてさらに詳しく述べています。

女は産みの苦しみに遭うと、自分の時が来たので悲しみに暮れる。しかし、子を産み落とすと、男の子がこの世に生まれた喜びで、もはやその苦しみを思い出すことはない。これは、神から男の子を産むという重荷を託されたシオンの娘たちが、出産の時が近づくにつれて、陣痛が激化してきたからである。そして、世界は彼女たちが神の子らを産み出し、全被造物を滅びの束縛から解放してくれることを期待している（参照ローマ8:19,21）。

最後に、神の子らは、主を待ち望むシオンの娘たちを通して聖霊によって生まれる。

大きな悲しみを伴って産み出されます。また、神がこの世に顕現されるすべてのもの、すなわち霊的なもの、経済的なもの、物質的なもの、肉体的なもの、結婚生活、健康など、すべてが苦しみを通して生まれなければならないことも注目に値します。神のあらゆる約束において、誰かがそれを心の中で宿し、あるいは妊娠し、そしてそれを自然に生み出すのです。

3

祈りの神秘

契約を思い出させる祈り

「ミステリー」という言葉はギリシャ語の「ムステリオン」で、秘密を意味します。オックスフォード辞典によると、原因や起源が隠されているか理解できないものを意味します。聖書的に、主なる聖霊に身を委ねて啓示される献身的な弟子には理解できないミステリーはありません。したがって、契約を思い出させる祈りと見なされるこれらの祈りを捧げる際に見るべき秘密は、祈りに対する神の反応であり、神が反応するとき、何をされるのでしょうか。私たちが終末時の霊的な祈り方について語る時、うめき、苦しみ、涙、嘆き、わめき、吠え、さらには異言について語っています。しかし、この章では、契約を思い出させる祈りとしてのうめきと涙に重点を置きます。神は創世記15章1-21節でアブラハムと契約を結んだ際、アブラハムに、彼の子孫は異国の地で寄留者となり、彼らに仕えることになるが、彼らが仕える国は40年間彼らを苦しめるであろうと告げられた。神は、彼らが仕える国から彼らを連れ出すと約束された。

民を裁き、豊かな財産をもって仕えるという神の御心は、ヤコブが息子の一人ヨセフの要請に応じ、子供たちを連れてエジプトへ渡った時に成就しました。ヨセフは兄弟たちに売られていました。ヨセフとエジプト王の死後、時が満ちると、エジプトにヨセフを知らない新しい王が現れました。神は悪魔にその王を動かすことをお許しになりました。そのため、悪魔はイスラエルの民を虐待し始めました。こうして神はイスラエルの民に御自身を現し、彼らを救うための神聖な計画を明らかにされる機会を得たのです。

時が経ち、エジプトの王は死にました。イスラエルの人々は奴隷の身分のために嘆き、泣き叫びました。そして、奴隷の身分のために彼らの叫びは神に届きました。神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされました。神はイスラエルの人々に目を留め、彼らを顧みられました。(出エジプト記2:23-25)

ため息とは何でしょうか？ため息はヘブライ語の「アナ」という言葉で、「アウナウ」と発音され、うめく、嘆く、嘆くという意味です。しかし、オックスフォード辞書によると、ため息は聞こえるほど深く息を吐くこと(悲しみ、疲労、安堵などを示す)を意味し、うめき声は痛みによって無理やり出された深い音を出すこと、または絶望や苦悩を表現することを意味します。

したがって、イスラエルの民が奴隷状態のためにうめき声をあげざるを得なかったとき、それは彼らが奴隷状態の中で苦しんでいたことから大きな苦悩や痛みを感じていたことを意味します。

エジプト人の手（つまり世界、肉体）によって。そして、4つの重要な出来事が起こりました。

- (a) 神は彼らのうめき声を聞いた
- (b) 神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚えていました。それは霊的には愛と正義の契約ですが、物理的にはイスラエルの子孫に約束の地（カナン）を与えるという契約です。

これは、神の正義を真に求める者と今日神が結んでいる契約と同じものです。

- (c) 神はイスラエルの民に目を留めた
- (d) 神は彼らを尊敬した。

同様に、この肉があなたや他のキリスト教徒に罪の束縛をもたらし、それによって神の王国を受け継ぐために愛と正義の中を歩むことを妨げているために、あなたがうめき、泣くなら、イスラエルの子らに起こったように、これらの4つのことがあなたにも起こり、神があなたを救うために降りて来られるでしょう。

主は言われた、「わたしは、エジプト（この世、肉体）にいるわたしの民の苦しみを確かに見、また、彼らを監督する者たちのゆえに叫ぶ彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの悲しみを知っているからである。わたしは下って来たのは、彼らをエジプト人の地から救い出し、あの地（暗黒の王国、この世）から連れ出して、乳と蜜の流れる広い良い地（神の王国、天国）、カナン人、ヘテ人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ連れ上るためである。」
(出エジプト記 3:7-

8) 神は、ご自分の民イスラエルの苦難をご覧になり、エジプトにいるご自分の民の苦しみをご覧になり、彼らをその地（闇の王国、肉体、この世）から豊かで悲しみや苦しみのない良い地（神の王国、魂の体、天国）へ連れ出すために下られたと語られました。そして、このことを証明するために、神は再びこう言われました。「神はモーセに言われた。『わたしは主である。わたしは全能の神の名によってアブラハム、イサク、ヤコブに現れたが、わたしの名エホバは彼らに知られなかった。わたしはまた、彼らが旅宿として滞在していた地を与えると、彼らと契約を立てた。わたしは、エジプト人に奴隷として捕らえられているイスラエルの子らのうめき声を聞いた。そして、わたしはわたしの契約を思い起こした。』それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。「わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプト人の重荷の下から導き出し、その奴隷状態から解放し、伸ばした腕と大いなる裁きをもって、あなたがたを贖う。わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、あなたがたの神となる。そしてあなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であり、あなたがたをエジプト人の重荷の下から導き出した者であることを知るようになる。」

わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓った地に、あなたたちを導き入れ、それをあなたたちに嗣業として与える。わたしは主である。（出エジプト記6:2-8）神は、アブラハム、イサク、ヤコブによって全能の神として知られていたが、神として認められていなかったと語られた。

族長たちは彼らをエホバとして知っていました。さらに神は、彼らと契約を結び、彼らのうめき声を聞き、彼らに巡礼の地を与えるという契約を思い出したと言われました。そして、このために、神はエホバの名をもって降り、イスラエルの民を世の束縛、すなわち肉の束縛から解放したと言われました。エホバは16の異なる機能を包含する複合名ですが、ここで神は「エホバの名にある16の奥義のうち7つをもって降り、イスラエルの民に完全な解放を与える」と言われました。私たちは、あなたがうめき泣き叫ぶとき、神はあなたの祈りを聞き、あなたが切り出された岩（イエス）を仰ぎ見て、アブラハムの信仰に従うならば、あなたとの契約を思い出してくださることを見えました（参照イザヤ51:1-2）。そして、神が降りてこられるとき、神はエホバの複合名にある16の奥義のうち7つの「我が意志」を明らかにされるでしょう。

神の数の算術における7は完璧または完全性です。したがって、これらの契約を思い出させる祈りを捧げている神の民に対する神の7つの意志は、神を心から待ち望んでいる真の弟子たちを救うという神の完全、完全、または完全な意志の表れです。

七つの「私」の意志の謎

神

(a)わたしはあなたたちをエジプト人の重荷の下から救い出す。彼はエホバ・シャマであり、

その名前はエゼキエル書48章35節に出てきますが、それは私があなたと共にここにいて、あなた方をエジプト（世界または肉体）の重荷から本当に解放するという意味です。

(b)わたしはあなたたちを彼らの束縛から解放する。神はエホバ・シャロームと呼ばれ、士師記6章24節に記されています。これは、神があなたたちをエジプト人（この世、つまり肉体）の手から解放した後、あなたたちに平安をもたらすという意味です。

(c)わたしは伸ばされた腕と大いなる裁きをもって、あなたたちを贖う。主はエホバ・ラーと呼ばれ、詩篇23章1節に出てきます。これは、主が彼らをサタンの束縛から贖われた後、彼らの牧者となることを意味します。ですから、わたしが望むことは何でも、イエスはカルバリの十字架で流された血によってすでに代価を払ってくださっています。だからこそ、イエスは万物に十分な神なのです。

(d)わたしはあなたたちをわたしの民とする。主はヘブライ語でエホバ・イルエ（JEHOVAH JIREH）と呼ばれ、創世記22章14節に出てきます。これは、主の祭司として恵みの御座に近づくなら、主がわたしに必要なものをすべて与えてくださるという意味です（参照ヘブライ4章16節）。

(e)わたしはあなたたちの神となる。あなたたちは、わたしがあなたたちの神、主であることを知るであろう。わたしがあなたたちをエジプト人の重荷から救い出す。彼はエホバ・ニシと呼ばれ、その名は出エジプト記17章15節に見られる。これは「エホバ、すなわち主はわたしの旗（勝利）」を意味する。

イエスを見つめるたびに、私たちは

カルバリの十字架上で私たちのためにしてくださったことのゆえに、私たちは征服者や勝利者以上の存在です。

(f)わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓った地に、あなたたちを導き入れる。彼はエホバ・ツイドケヌと呼ばれ、エレミヤ書23章6節に出ています。これは、主がわたしたちの義であるという意味です。その地が義の地であるからといって、わたしたちが義に成長していくわけではありません。義に生きるためには、神の恵み、つまり賜物を受ける必要があるだけです。十字架上でイエスがわたしたちのために罪とされたので、わたしたちは神の義となるのです。キリストが十字架に釘付けにされた瞬間、わたしたちの罪もすべてキリストと共に十字架で死に、わたしたちは神の目に自動的に清い者となりました。今は、日々神の声を聞き、御言葉に従いながら、それを実践し、成し遂げていくだけが、わたしたちに残された仕事なのです。

わたしはそれをあなたたちの相続地として与える。わたしは主である。主はエホバ・ラファであり、これは出エジプト記15章26節に記されている。これは主が私たちの神聖な癒し手、あるいは医者であることを意味する。

私たちは毎回癒しを求めて走り回っている必要はありません。むしろ、主イエスである癒し主が必要なのです。主が私たちの内にいて留まってくださるなら、私たちは病気にならず、たとえ悪魔が誰かを病気で襲っても、あなたが信仰の祈りを捧げれば、すぐに癒しを受けます。ですから、あなたがうめき泣き叫ぶ時、あなたは神との契約を思い起こし、神はあなたを救うために降りて来られます。そして、主が降りて来られる時、主は7つの「わたしの意志」、つまり16のエホバの御名のうち7つを現して、かつてそうされたように、あなたを救ってくださいます。

イスラエルの子らに。これは教会が知らなかった偉大な神秘です。なぜなら、教会が、神との契約関係にある民を解放するために神が示したこの七つの偉大な御心を知っていたなら、教会は絶えず激しく嘆き、泣き続けていたでしょうから。

そのために、私たちは弱り果てません。たとい私たちの外なる人は滅びても、内なる人は日々新たにされます。わたしたちのつかの間の軽い苦しみは、わたしたちの内に、はるかに重い永遠の栄光を生じさせるのです。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に続くからです。（コリント人への手紙二 4:16-18）ここで言う軽い苦しみとは、うめき、苦しみ、涙、嘆き、わめき、叫びといった霊的な祈り、そして断食によってどのように魂を苦しめるかを指しています。また、キリストの命を生きるために、今、肉体において私たちが経験する迫害についても言及しています。見えるものとは、地上の肉体、つまり物質界に関係するすべてのものであり、見えないものとは、霊の肉体、つまり霊界に関係するすべてのもののことです。見えるものは地球と共に滅ぼされるので一時的なものですが、見えないものは天国で私たちの贖われた魂の体と共に永遠に生きるのです。

なぜなら、この幕屋という地上の家が解体されたとしても、私たちは神の建物、神の家ではない家を持っていることを知っているからです。

手で造られ、天に永遠に存在するもの。私たちは、天から来る私たちの住まいを着ることを切に願ひ、うめき声を上げています。もし着ていれば、裸でいることがないように。この幕屋にいる私たちは、重荷を背負ってうめき声を上げています。それは、着物を脱ぎたいからではなく、着物を着ることで、死すべきものが命に呑み込まれようとしているからです。私たちをまさにこの目的のために働かせてくださったのは神であり、神はまた、御霊という保証を与えてくださいました。
(コリント人への第二の手紙5章1-5節)

使徒パウロを通して聖霊は私たちに、もし私たちの地上の家（肉体）である血肉が消え失せたとしても、私たちには神の家（魂の体）がある、それは手で造られたものではなく、肉と骨で満たされたもので、天にある永遠のものである、と保証しています。このため私たちは、義の衣を着て、あるいは覆われるならば、罪の中にいることが見つからないであろう、天から来る体を着ることを切に望みながら、肉の体においてうめき声を上げています。この地上の幕屋で私たちがうめき声を上げる理由は、私たちの肉が私たちに罪を犯させる仕方によって、私たちが重荷を負っているからです。そして、私たちが贖われた、あるいは魂の体を着れば、この肉の体に宣告された死は、命に満ちた魂の体によって、支配され、あるいは服従させられると私たちは信じています。

創造物全体を同じ呪いの下に置いたのは神であり、神は私たちにこの条件を満たすだけでなく、私たちがうめき声を上げるのを助ける聖霊も与えてくれました。
そして彼らは、耳が聞こえず、話すのに障害のある人をイエスのところに連れて来て、

イエスは彼を群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、つばきをし、その舌に触れられた。そして、天を仰いでため息をつき、エパタに「開け」と言われた。するとたちまち、彼の耳は開き、舌の糸が解けて、はっきりと話せるようになった。

(マルコ7:32-35)イエスがうめき声(ため息)をあげられた時、神の力がその男の耳が聞こえず口がきけない悪霊を追い出し、イエスはその男に癒しを宣言されました。神の油注ぎがその男に入り、彼は瞬く間に聞こえ、話せるようになりました。これは病人に癒しを与えるためのうめき声です。咳や鼻炎に苦しみ、うめき声をあげるまでは、この効果を理解できないかもしれません。しかし、神の力が悪霊を追い出し、薬にお金をかけずに癒される様子を目の当たりにするでしょう。

するとパリサイ人たちが進み出て、イエスを試そうとして、しるしを求め、質問し始めた。するとイエスは心の中で深く嘆息して言った。「なぜこの時代の人にはしるしを求めるのか。よく言っておく。この時代には、しるしは与えられない。」

(マルコ8:11-12)

イエスは、ご自身を誘惑し、神の戒めに背かせようとした誘惑の悪魔たちからご自身を救うために、うめき声を上げました。これは、うめき声は、あらかじめ考え出された、あるいは計画された邪悪な思いではなく、誘惑へと誘い込む瞬間的な邪悪な思いからあなたを救い出すことができることを示しています。

わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを見、彼らのうめき声を聞いたので、彼らを救うために下って来た。さあ、来なさい。わたしはあなたをエジプトに遣わす。（使徒行伝 7:34）

うめき声は即座に解放をもたらします。うめけばうめくほど、解放され、うめけばうめくほど、私の人生に神の働きがもたらされます。私には、神の働きを私の人生、そして他の人々の人生にもたらす責任があります。

彼はまた、わたしの耳に大声で叫んで言った。「町の守備につく者たちは、おのおの破壊の武器を手に持って近寄れ。」

すると、北の方にある高い門の道から六人の男がやって来た。彼らは皆、手に殺戮の武器を持っていた。そのうちの一人は亜麻布をまとい、腰に筆記用のインク壺を持っていた。彼らは中に入り、青銅の祭壇のそばに立った。すると、イスラエルの神の栄光は、ケルブの上に立っていたところから、神殿の敷居まで昇っていった。

そして彼は亜麻布を着て、脇に筆記用のインク壺をつけた男を呼び寄せた。すると主は彼に言われた。「町の中、エルサレムの中を巡り、その中で行われているあらゆる忌まわしい行いに嘆き悲しむ者たちの額に印をつけよ。」また他の者たちには、私の聞こえるところでこう言われた。「町中を巡って彼を追って行き、打ち殺せ。惜しむことなく、憐れむことなく。老いも若きも、女も幼子も、ことごとく殺せ。」

女たちよ。しかし、その刻印のある男には近づいてはならない。わたしの聖所から始めよ。それから彼らは、神殿の前にいる老人たちから始めた。そして主は彼らに言われた。「神殿を汚し、庭を殺された者で満たせ。出て行け。」そこで彼らは出て行き、町の中で人を殺した。（エゼキエル9:1-7）

神は使者を遣わし、筆記用のインク壺を持たせて町（信者の陣営）へ行かせ、神の民の忌まわしい行いや罪のためにうめき泣く男たちや民の額（心）に刻印もしくは封印を施した。そして、滅ぼす武器を手にした他の天使たちに神は言った。「神の民の額に刻印を押させるために遣わされた最初の天使の後を追って、同じ町、つまり信者の陣営を通って行き、教会の罪のためにうめき泣いていない者を、若者も老人も、幼子も女も、すべて殺せ。ただし、うめき泣きのゆえに刻印を押された者には、触れてはならない。」これは非常に恐ろしいことである。なぜなら、主がさらにこう言われたからである。「天使たちはまず神の家で、昔の人たちや大牧師たちから破壊もしくは審判を始める」（参照）。

（ペトロの手紙—第4章17～18節）

皆さん、これは非常に深刻なことです。神の裁きが始まっており、第七日、すなわち千年王国に近づくにつれて、神の軍勢が第七日の始まりに立ち上がり、神の力を現すため、裁きは激化していくでしょう。ですから、神の牧師たちも、その会衆も、真剣に嘆いていないのです。

そして、自分たちの罪とキリストの体全体の罪を嘆きながら、これから神の裁きを受けるのです。
しかし、うめき声をあげて泣いている者たちは、印を押され、あるいは封印され、液体の火、あるいは火の洗礼が注がれて王国の福音を宣べ伝える力が与えられるまで、豊かな恵みを受け続けるでしょう。

4

誰がこれらの祈りを捧げるべきか 強力な祈り？

この質問に、単純な人々の心を惑わすことなく、十分に答えるためには、祈りについて述べている数多くの聖句を比較し、バランスを取らなければなりません。使徒パウロは、この世の知識と霊的知識の両方において、この終わりの時代に創造された神の計画について聖霊から啓示された事柄から、非常に多くの知識を蓄積してきましたが、このように述べています。「今の時の苦しみは、私たちに現されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものだと思います。被造物は神の子たちの出現を切実に待ち望んでいます。被造物は虚無に服させられました。それは自ら望んだのではなく、服従させた方の御心によるのです。被造物自身も滅びの束縛から解放され、神の子たちの栄光に輝く自由に入るからです。私たちは、すべての被造物が今に至るまで、共にうめき、共に産みの苦しみを続けていることを知っています。」そして彼らだけではなく、御霊の初穂を持っている私たち自身も、心の中でうめきながら、子として与えられること、すなわち、体の贖いを待ち望んでいます。

御霊はわたしたちの弱さをも助けてくださいます。わたしたちはどのように祈るべきか分からないからです。しかし、御霊ご自身が、言葉に尽くせないうめきをもって、わたしたちのために執り成しをしてくださいます。人の心を探り知る方は、御霊の思いが何であるかをご存知です。御霊は、神の御旨に従って、聖徒たちのために執り成しをしてくださるからです。 (ローマ8:18-27)

神は、今の時代の苦しみは、教会とその福音を受け入れる人々に降る晩雨を通して神が私たちに明らかにしようとしているものとは比べものにならないと言われました。私は、被造物全体が今に至るまで共にうめき、共に苦しみを分かち合っていることに下線を引いたのは、神の子らの顕現を待ち望んでいるのは被造物全体であることを示すためです。これは真実です。なぜなら、神によって創造されたすべてのものは、直接的あるいは間接的に、うめき、苦しみ、泣き、嘆き、わめき、吠え、異言を語り、あるいは神への祈りを形作る何らかの意味深い声を発することで、神の子らを顕現させてきたからです。なぜそうなるのでしょうか。それは、神の創造物の頂点である人間が神に対して罪を犯し、呪われた瞬間、被造物全体が呪いの下に置かれるからです。彼らの頭が罪を犯したため、神のかたちに造られた他の被造物で義と認められ、神の栄光のうちに生き続けることができる者はいないからです。神はまた、残りの被造物を通して執り成しをする者を立て、彼らが指導者（人間）のために効果的に執り成しを行えるようにしたかった。そして、指導者は贖われたらすぐに彼らを解放するであろう。このため、被造物はすべて同じ支配下にあった。

人間は呪いを受けます。ですから、神の子らの顕現によって人間が贖われる時、彼ら（神の子ら）は今、創造物を滅びの束縛から解放するよう命じ、神の子らと同じ栄光に満ちた至福を享受し始めるでしょう。私が強調し、またお話ししたいもう一つの点は、聖霊が神の御心に従って聖徒たちのために執り成しをなさることです。被造物が苦しみうめき苦しんでいるのと同じように、聖霊もまた、悪魔とその闇の手先が邪魔することのできないうめきをもって、神の聖徒たちのために執り成しをなさることにより、聖徒たちの弱さを助け、受け入れられる祈りをなさるのです。聖徒たちが理解をもって、あるいは他の方法で祈る方法を知らないからではなく、彼らが知っているべき方法で何を祈るべきかを知らないか、あるいは彼らが祈っているものが神の完全な御心ではないかもしれないからです。心を探る神は、聖霊が聖徒たちを通して何のためにうめいているのかをご存知です。ですから、神の御心に従ってうめき、苦しみを負うことができるのは、聖徒たちだけです。祈りにおいてもう一つ重要なことは、神は罪人が捧げるいかなる祈りにも関心を持たないということです。

わたしたちは、神が罪人の言うことを聞かないことを知っています。しかし、神を敬い、神の御心を行うなら、神はその言うことを聞いてくださいます。（ヨハネ 9:31）

主は悪者のいけにえを忌み嫌い、正しい者の祈りを喜ばれる。

（箴言15:8）。

耳を背けて律法（神の言葉）を聞く者は、その祈りさえも忌まわしいものとなる。

（箴言28:9）。

これらの聖句は、神が罪人の祈りに耳を傾けてくださらないという事実を証明しています。しかし、誰もが自分の祈りに耳を傾けていただきたいと願っています。しかし、神が人類に無償の贈り物として、また私たちの罪のために受け入れられる犠牲として差し出てくださいました主イエスを受け入れることを拒むなら、神はあなたとあなたの祈りも拒絶されるという事実は変わりません。祈りは神と交わる手段ですが、神は、父なる神に至る唯一の扉、道である主イエスを通して神のもとに来ない者とは一切交わるできません（参照：ヨハネ1:14）。

ヨハネ10:9、14:6）。神殿の奉献を終えたソロモンの祈りに神は答えてこう言われました。「わたしが天を閉じて雨を降らせず（祝福や油注ぎを降らせず）、イナゴに命じて地を食い尽くさせ（悪霊に彼らの器を滅ぼさせ）、わたしの民に疫病（不治の病）を送ったとしても、わたしの名によって呼ばれるわたしの民がへりくだり、祈り、わたしの顔を求め、悪の道から離れるなら、わたしは天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地を癒すであろう。」（歴代誌7:13-

14）。

神は、わたしの民、わたしの名によって呼ばれる民を強調し続けました。それは、神の名によって呼ばれる神の民（キリスト・イエスを信じる者）こそが、神に受け入れられる祈りを捧げることができることを示したからです。

神との個人的な完全な交わりを持つという神の条件を受け入れた人々は、神に耳を傾ける以外に選択肢はありません。キリスト教を信仰していると公言する世界においてさえ、神との契約関係に入っていない信者（私の著書『クリスチャンの最後まで競争（王座への資格）』を参照）、あるいは神の御心に従って歩んでいない信者の多くは、祈りが即座に聞き届けられることはありません。

そしてほとんどの場合、彼らの祈りは全く聞き届けられません。なぜなら、彼らの祈りは神の御心にかなっていないからです。神の御心を知らなかった多くの人は、御心が何であるかを告げられても、それを求める心構えさえありません。この例は、主が地上におられた時、主とその宣教の業に深く関わっていた、同じ両親を持つ二人の姉妹に主が語った言葉の中に見ることができます。

さて、彼らが旅の途中、イエスはある村に入られた。マルタという婦人がイエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアもイエスの足元に座って、御言葉に聞き入っていた。

しかし、マルタは多くの奉仕に心を煩わせ、イエスのもとに来て言った。「主よ、妹が私だけに奉仕をさせているのを、お気になさらぬのですか。妹に私を手伝うようにおっしゃってください。」イエスは答えて言われた。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに心を配り、思い煩っています。しかし、必要なのは一つだけです。マリアはその良い方を選んだのです。それを彼女から取り上げてはなりません。」（ルカ10:38-

42）。

これは同じ両親から生まれた二人の姉妹の物語であり、靈的に言えば、同じ神の靈によって生まれた二つの教会を象徴しています。姉のマルタは主に仕えることに心を痛めていただけでなく、妹のマリアが主イエス・キリストの足元に座り、神の御心を聞き、理解しようとして、むしろその言葉を楽しんでいることを心配していました。

そこでマルタは、マリアを招いて共に仕えるよう主イエスに懇願しました。しかし主は、マリアが絶えず不平を言い、自己中心であることで、神の御心をないがしろにし、御心を知り、それを行うことを選んだマリアから、御心を取り上げることはできないと告げられました。これは、陣営にいる大多数の信者に共通する状況です。彼らは、マリアのように主を待ち望み、神の御心を聞いているにもかかわらず、完全に主から離れているシオンの娘たちに対して、激しく不満を漏らしています。マルタを代表するこの信者の集団は、十字軍、伝道、セミナー、リバイバルなどの活動に明け暮れており、神の御心を聞き、知る時間さえありません。それでも彼らは、神が語り、行なっていることを聞くために時間を捧げている人々に対して不満を漏らしています。それゆえ、神は、象徴的にマリアを表すシオンの娘たちの行いを、良い行いとして称賛し、それは取り上げられるべきものではないとされました。

メアリーが注目されたもう一つの重要なことは、

そこで彼らはイエスのために夕食を用意し、マルタが給仕した。ラザロもイエスと共に食卓に着いた者の一人でした。

そこでマリアは、非常に高価なナルドの香油一ミナを取り、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でその足を拭いた。すると、家は香油の香りで満たされた。すると、弟子のひとり、シモンの子でイエスを裏切ろうとしているイスカリオテのユダが言った。「なぜこの香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」…するとイエスは言われた。「彼女をそのままにしておきなさい。彼女はこれをわたしの葬りの日のために取っておいたのだ。」(ヨハネ12:2-7)

彼女が私の体にこの香油を注いだのは、私の埋葬のためだったのです。よく聞きなさい。この福音が全世界で宣べ伝えられる所ではどこでも、この女のしたことも記念として語られるでしょう。(マタイ26:12-13)

ヨハネ12章では、マルタはルカ10章で主が望まれる良いことについて主から語られた教訓から学ぶことも、自分の意志を捨てて矯正を受ける覚悟もできていません。そのため、マリアが主とのより強固な関係を築き始める間も、マルタは奉仕を続けました。まず、彼女はマリアに油を注ぎました。

マリアは、非常に高価なナルドの香油を一ポンド塗って主の足を拭きました。これは、彼女が何らかの犠牲を払ってでも主に愛を捧げたことを意味します。次に、彼女は髪の毛で主の足を拭きました。これは、彼女が自分の栄光(髪の毛は女性の栄光です)を主に捧げた、あるいは明け渡したことを意味します。つまり、彼女は死に至るまで主に愛と服従を捧げたのです。これは事実です。なぜなら、イエスの死の日に、このイエスの母マリアと他の忠実な女性たちが、試練に耐えたからです。

教会の柱とされる使徒たちが命からがら逃げ去った時、彼女たちは信仰を捨て、主への愛を死に至るまで示しました。主はこの行為を称賛し、この御国の福音が宣べ伝えられる所ではどこでも、夫や彼女たちの上に立つ権威者を通して主イエスに捧げられた女性たちの愛と完全な服従も、記念として宣べ伝えられると預言されました。

マリアが主と築いていた強固な関係は、ラザロが亡くなったときにはっきりと見ることができました。マリアの願いや祈りは、イエスに行動を起こさせなかったマルタの願いや祈りよりも、すぐに聞き届けられたからです。

そのとき、マルタはイエスが来られると聞いて、出迎えに行ったが、マリアは家の中に座ったままであった。
するとマルタはイエスに言った。「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。しかし、あなたが神に求めることは何でも、神はかなえてくださることを、私は今でも知っています。」
イエスは彼女に言われた、「あなたの兄弟は復活するでしょう」。マルタはイエスに言った、「終わりの日の復活の時に、彼が復活することは知っています」。イエスは彼女に言われた、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は決して死なない。あなたはこれを信じるか」。マルタはイエスに言った、「はい、主よ。『あなたこそ、世に来られるべき神の子、キリストであると信じます』」。

こう言って、彼女は立ち去り、ひそかに妹のマリアを呼び、「主が来られました。あなたを呼んでおられます」と言った。彼女はそれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに来た。イエスはまだ来られていなかった。

町には入らず、マルタが出迎えたその場所にいた。その時、家の中にマリアと一緒にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に行き泣いているのだと言って、彼女について行った。そのとき、マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見ると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ、あなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。」イエスは、彼女が泣いており、彼女と一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをごらんになると、霊のうめきを覚え、動揺して言われた。「彼をどこに置いたのか。」彼らはイエスに言った。「主よ、来てご覧なさい。」イエスは泣かれた。

すると、ユダヤ人たちは言った。「見よ、イエスはどんなにイエスを愛されたことか。」彼らのうちのある者は言った。「盲人の目を開けたこの人が、この人さえ死なせないようにすることはできなかったのか。」そこでイエスは再び心の中でうめきながら墓に行かれた。それは洞穴で、その上に石が置かれていた。イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタが言った。「主よ、もう臭くなっております。死んで四日も経ちますから。」イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見るだろう、と、わたしはあなたに言ったではありませんか。」そこで彼らは死人を納めた場所から石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださり感謝します。あなたがいつもわたしの願いを聞き入れてくださっていることは、わたしも知っています。しかし、そばに立っている群衆のために、あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるために、こう言ったのです。」こう言い終えると、イエスは大声で「ラザロよ、出て来なさい」と叫ばれた。

(ヨハネ11:19-43)

私たちは、神が御心を行う人々の祈りにどのように応えられるか、また、神の完全な御心を拒否し、神のために働くという名目で自分の意志を行う民の祈りに、神が何気なく耳を傾けられるかを見てきました。マルタが選んだ神のために働くことは、彼女を神と神の言葉を真剣に受け止めない偽りの礼拝者にしました。彼女は神が救いを与えてくれると信じていましたが、それは今ではなく、ずっと後のことだったと信じていました。一方、神と共に働くという良い面を選んだマリアは、神を愛し、神の御心に服従し、神に従う真の礼拝者となりました。マルタの言葉はどれも、主イエスにある神の憐れみを動かすことはできませんでした。なぜなら、彼女は今日の神ではなく、明日の神を信じていた偽りの礼拝者だったからです。神と共に働く真の礼拝者であるマリアは、招かれて初めて神のもとに行くことができました。彼女は実際には、招かれずに主のもとに行ったマルタとは全く異なり、神からレーマを受けるまで待っていたのです。マリアはレーマを受けて主のもとへ行き、真の礼拝者としてまず最初に、主イエス・キリストの足元にひれ伏し、深い畏敬の念を抱きながら主を礼拝しました。その後、彼女はマルタが先に述べたことを繰り返し、泣きながら祈るという、より強力な手段の一つを用いて、主に願いを告げ始めました。主イエスは深く憐れまれ、うめき泣きながら墓に来られ、奇跡を行い、真のマリアの心の願いを叶えられました。

崇拜者。ユダヤ人はイエスがラザロへの愛ゆえに泣いたと述べていますが、イエスが泣き嘆いたのはマリアの涙が御自身の霊に触れたからであり、その悲しみの中に真の崇拜者がいるのを見て心を痛めたのです。墓に近づいた時、イエスは神が御自分の願いを聞いてくださったことを確信しました。なぜなら、イエスは嘆き嘆くことで神に契約を思い起こさせたからです。そこでイエスは目を上げ、御自分の願いを聞いてくださったことに感謝し、これからもずっと御自分の願いを聞いてくださると信じていると述べました。なぜイエスはこのような発言をしたのでしょうか。

イエスは、自分が常にうめき、泣いていることを知っていたため、この言葉を発しました。それは、神がアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてすべての信仰の子らと結んだ契約を思い起こさせるためでした。そしてこの契約は、アブラハムと信仰の子らが愛のうちに歩む（神の戒めに従う）なら、神（アブラハム）は彼らを義とし、彼らの心の願いを叶えてくださることを示しています。それゆえ、神は降りてきて、アブラハムが神に求めているものから救い出す以外に選択肢はありませんでした。こう言って、イエスは大声で叫び、ラザロの霊を生き返らせました。

わたしは嘆き疲れ果て、夜通し床を水浸しにし、涙で寝床を濡らす。わたしの目は悲しみで衰え、すべての敵のせいで衰えていく。不義を行う者たちよ、すべてわたしから離れ去れ。主はわたしの泣き声を聞かれたからだ。主はわたしの願いを聞かれ、主はわたしの祈りを受け入れてくださる。（詩篇 6:6-9）不義を行う者たちは去って行くであろう。

私がうめき、泣き叫ぶ時、神の御霊が私の祈りを邪魔する悪霊を追い払ってくれるからです。不信者や罪人、あるいは信者であっても、義にかなって歩んでいない人が私の周りにいて、私の中にある主の生き方によってまだ改心する準備ができていないのを見る時、私は本当にうめき、苦しみ、泣き叫んでいるわけではありません。

ダビデがここで書いたことは、旧約聖書の聖徒たちが聖霊の洗礼を受けずにうめき声をあげていたことを示しています。これは、大きな重荷を背負ったとき、聖霊に無意識に動かされて初めてうめき声をあげることができる信じている多くの人々の不安を和らげるためです。

最後に、主がこの章で明らかにされたことは、人間であろうとなかろうと、すべての被造物がこれらの力強い祈りを捧げることができるが、すべての人がこれらの祈りの答えを得られるわけではないことを示しています。キリスト教世界においてさえ、神との契約関係にあり（私の著書『Christian Race To The End（王座への資格）』を参照）、神の御心を知り、マリアのようにそれを実行する者だけが、これらの祈りに即座に答えを得ることができるのです。

5

神の子である

遠吠えを期待しますか？

遠吠えで知られる動物といえばオオカミです。オオカミは困った時に吠えたり、痛みを表現したりするからです。しかし、聖典には遠吠えや吠えることについて多くの記述があります。だからこそ、神の子は遠吠えをすることが期待されているのでしょうか？という疑問が湧いてきます。

遠吠えが何であるかについて長々と説明する前に、この質問に率直に答えさせてください。はい、神の子は遠吠えすることが期待されています。なぜなら、聖書に記されていること以外にも、私たちの信仰の創始者であり完成者である主イエスは、地上での生涯でできるだけ多くの回数遠吠えをされ、私たちが何をすべきか、何をすべきでないかについての模範となってくださっているからです。遠吠えという言葉はヘブライ語で「ヤバル」で、叫ぶ、痛み、興奮、恐怖などの長く大きな叫びを意味します。痛みや興奮のときに遠吠えをすること、興奮のときに遠吠えをすること、恐怖や危険のときに遠吠えをすることなどについて聖句が記されているため、このように説明する方が適切です。そして、神の御霊の導きにより、主がこの章でさらに多くの事実を明らかにしてくださるので、私はそれらのそれぞれについて深く掘り下げてみたいと思います。

神の創造物の頂点である人間が神に罪を犯したとき、全被造物は享受していた至福を失い、無秩序の状態に陥りました。これは、彼らの頭であり友である人間がもはや支配権を握っておらず、サタンと呼ばれる恐ろしい敵が支配権を握っていたためです。そして、彼らが経験し始め、そしてこれからも経験するであろう苦悩の中で、全被造物は宇宙の創造主に介入を願い、人間と他の被造物をサタンの苦痛に満ちた支配から救い出すよう求め始めました。

使徒パウロがここで述べているように、それぞれが自分にとって理解しやすい方法で祈っていました。「この世には、実に様々な声がある。そして、その一つ一つに意味のないものはない。」
(コリント人への手紙— 14:10)神の創造物の頭である人間は、神が祈りの手段として、そして被造物を滅びの束縛から救い出すよう神に促す手段として、この世のあらゆる声を通して人間を導くとは、知る由もなかったでしょう。しかし、神の被造物の中で、祈り、苦痛、興奮、恐怖、危険を表現する手段として遠吠えすることで知られる動物は、狼です。しかし、イエス・キリストは肉体を持っていた時代、ご自身が経験していることを表現する手段として遠吠えを続けました。

彼はまた別の箇所でこう言っています。「あなたは永遠にメルキゼデクの位に等しい祭司です。彼は肉体にいたとき、死から救う力のある方に、激しい叫びと涙をもって祈りと願いを捧げ、その祈りが聞き入れられたとき、

恐れられました。彼は御子であったにもかかわらず、受けた苦しみによって従順を学びました。（ヘブライ5:6-8）

イエス・キリストはメルキゼデクの位階に従う祭司であり、激しい叫びと涙をもって神に捧げた祈りと嘆願は、彼の絶え間ない叫びでした。イエスが恐れ、そして神が彼を救ったのは、十字架上の死でした。イエスは神の御子であるにもかかわらず、従順を学ぶために肉体において大きな苦しみを受けなければなりません。今日、キリスト教世界の信者の大多数は、キリスト教徒が従順を学ぶために肉体において苦しむべきだとは信じていません。彼らは、主イエスが私たちのためにすべてをしてくださったので、肉体においていかなる苦しみも必要ではないと信じています。イエスが肉体において苦しめたのは、従順を学び、まず第一にご自身の魂と、自らの意志を捨ててイエスと共に苦しむことに同意した人々の魂を救うためであったことを、はっきりと理解してください。イエスが地上の肉体を救うために死んだものではありません。なぜなら、アダムとエバが罪を犯した時、裁きと断罪は肉体に定められたからです。救われる者は皆、死ぬか、あるいは魂の体が贖われるための身代金としてこの肉体で苦しまなければなりません。

肉の命は血の中にあるからである。わたしは、あなたがたの魂のために贖罪をするために、それを祭壇の上であなたがたに与えた。血は魂のために贖罪をするからである。

（レビ記17:11）地上の肉体には血があり、神はこの血を用いて祭壇の上で魂の体のために贖罪をなすように命じられました。

地上の肉体から血を抜いても、肉体は生き続けることができます。ですから、血を含んだ地上の肉体は、魂の体の贖いの代価を支払うために用いられるのです。

これらすべてを踏まえると、苦痛に苦しむ時に神に救いを祈り、嘆願する方法であることが明らかです。イエスが父なる神に死の苦しみから救われるために何度も遠吠えをしたように、私たちも今、できる限り何度も祈りという形でイエスに遠吠えをすべきです。そうすれば、私たちも死（すなわち霊的な死、魂の死）から救われるでしょう。

羊飼いたちよ、泣き叫べ。群れの長たちよ、灰の中に身を転がせ。あなたたちの虐殺と追放の日は終り、あなたたちは美しい器のように倒れるからだ。（エレミヤ25:34）

さあ、富んでいる人たちよ。あなたたちに降りかかるであろう災難のことを思っ
て泣き叫びなさい。（ヤコブ書5:1）

羊飼いの泣き叫ぶ声が聞こえる。彼らの栄光は失われたからである。（ゼカリヤ書 11:3）

これらは、何らかの形で主に反抗してきた民に降りかかる裁きを恐れて泣き叫ぶことについて述べている聖句の一部です。これは、まだ聞く耳を持つ者たちに、罪深い生き方から回心し、神に従うことによって命からがら逃げ出すように告げる方法です。また、神の定められた計画が、

裁きを命じられたので、悔い改めて完全に改心しない限り、どれだけ叫んでも彼らを救うことはできません。

泣き叫べ、主の日が近づいている。それは全能者からの滅びとして来る。(イザヤ13:6)

大声で叫べ、惜しまず、ラッパのように声をあげ、わたしの民にその背きを、ヤコブの家にはその罪を告げよ。(イザヤ58:1)

シオンでラッパを吹き鳴らせ、わたしの聖なる山で叫びをあげよ。この地に住む者は皆震え上がれ。主の日が来るからだ。それは近づいている。

(ヨエル 2:1)。

これらは、諸国民、神の民、罪人などに対する、彼らの罪、そして多くの人が審判の日と呼ぶ私たちの主であり救い主イエス・キリストの再臨についての警告信号のような遠吠えです。この種の遠吠えは、意図された危険を知らない人々にも気づかせます。どのようにでしょうか？それは、町で異常な遠吠えが一度起こると、人々が何が起きているのかを尋ねに出てくるからです。アモスの言葉から学ぶことができます。「町でラッパが吹かれて、民が恐れないでいようか。町に災いがあって、主がそれをなさらなかったら、どうして恐れるだろうか。」(アモス書 3:6)ここでのラッパは、遠吠えのような大きな叫び声のようなものであり、そのような叫び声が上がると、町では何か恐ろしいことが起こった、あるいは起ころうとしていることに大きな恐れが生じ、人々は解決策を求めてあわてふためき始めます。

酔いどれたちよ、目を覚ませ、酒を飲む者たちよ、新しい酒のゆえに泣き叫べ。それはあなたがたの口から断たれたのだ。(ヨエル 1:5)

祭司たちよ、帯を締めて嘆き、祭壇の奉仕者たちよ、泣き叫べ。わたしの神に仕える者たちよ、来て、粗布をまとして夜を明かせ。穀物の供え物と注ぎの供え物が、あなたたちの神の家から差し控えられているからだ。(ヨエル1:13)このような泣き叫ぶ声こそ、神の民に対する神の憐れみを掻き立てるものである。新しいぶどう酒は

新しい油注ぎ、あるいは新しい霊を表しています。初期の使徒たちが聖霊のバプテスマを受けたのは、イスラエルが新しいぶどう酒、新しい肉の供え物、七週の祭り、あるいはペンテコステの祭りを祝っていた日だったことは注目に値します。そして、使徒行伝 2 章 12-15 節で、初期の弟子たちが聖霊のバプテスマを受けた後に来た最初の団の人々が、当時祝っていた祭りであったため、自分たちは新しいぶどう酒に酔っていると信じたのはこのためです。ペテロはすぐに反応して、まだ午前 9 時 (つまり午前 9 時) なので、自分と彼の同僚たちは酔ってはならず、むしろ預言者ヨエルによって語られた父の約束を果たしているのだと言いました。ですから、ヨエル書 1 章のこの 2 つの節で、神は彼らの口から新しいぶどう酒を断ち切るとおっしゃいました。つまり、神は彼らに新しい油注ぎを味わわせないということです。肉の供え物と飲み物の供え物は、神の真の言葉、聖霊からの神聖な啓示、そして聖霊の真の賜物の現れを意味するとも言われています。

困っている人々に霊的な癒しを与えようとしたが、神はこれらの捧げ物を差し控え、人々はそれを受け取らないと言われました。しかし、神が命じたように彼らが泣き叫び、叫ぶと、神の同情心が彼らに及び、ヨエル書第2章23節で約束されているように、神はその油注ぎを解き放ち、神の民が肉と飲み物の捧げ物を楽しめるようにされるでしょう。これは、霊的に眠っていた神の民が、断食し、泣き叫び、昼も夜も神の御前に進み出て待ち始めるときに受け始めるのと同じ経験です。泣き叫びは、うめき声や泣き叫びと同じ効果をもたらします。それは、神がその民をあわれみ、彼らをそれ以上の罰や苦しみから救うように動かすからです。

結論として、遠吠えは神の民に起き上がるための警告信号であり、遠吠えは神の民に対する神の同情を引き寄せ、神は彼らを救うために行動し、不可能と思われたことが自分に起こった後には興奮して遠吠えすることができるのです。

6

咆哮する、判断力のある 霊の中で祈ることの一部

轟音を知る人、あるいはその音を聞く人なら、悪霊に対する祈りを通して裁きの雨を降らせるには、轟音以上に良い方法はないということに、異論なく同意してくれるでしょう。私の言っていることの意味を理解したいなら、少し立ち止まって、雷鳴が轟いた時に何が起こるかを瞑想してみてください。あるいは、海岸に行って海が轟く時、人々が波に追いつかれるのを待たずに逃げ出すのを見てください。あるいは、動物園に行ったり、テレビで動物界探検を見て、ライオンが吠えるたびに他の動物たちが怯えて逃げ出す様子を見るのも良いでしょう。どんな器を通して活動する悪霊も、聖霊に満たされた神の油注がれた人、つまり神の御霊に身を委ね、その聖化された器を通して轟く人に直面すると、震え上がって逃げ出すのと同じです。轟音はヘブライ語で「シェーガー」と発音され、シェ・アウ・ガウと発音されます。これは「ゴロゴロ」または「うめき声」を意味します。オックスフォード辞典によると、「ゴロゴロ」とは、雷鳴や銃声のような深く重く、持続的な音を出すことを意味します。

この章では、一部の人々の中で働き、神の聖徒たちを攻撃する悪霊に神の裁きを下す霊的な方法として、咆哮についてお話ししたいと思います。そして、咆哮が行なわれるたびに、神の油注ぎの力によって悪霊たちは器から追い出されるか、あるいは大きな恐怖がそれらの器に降りかかり、彼らは逃げ出すか、命からがら逃げ出すかのどちらかになります。

主は高い所からほえ、その聖なる住まいから声をあげ、その住まいに向かって力強くほえ、ぶどうを踏む者のように、地に住むすべての者に向かって叫ぶ。（エレミヤ書 1:1）

(25:30)神が高き所からほえ、聖なる住まいから声を発するということは、神が聖なる宮である、聖別された器（すなわち、主のために聖なる生活を送る者たち）を通してほえることを意味します。そして、神がほえると、神の油注ぎの力は、ライオンが獲物を求めて狩りをするたびに、捕まえた動物を踏みつけるのと同じように、地に住むすべての者たち（すなわち、私たちの器、あるいは私たちを非難したり攻撃したりする者たちの器に宿る悪魔たち）を踏みつけ始めます。そして、神への畏れが告発者たちを捕らえ、彼らは神の民から逃げ出すでしょう。

万軍の主はこう言われる。「もう少しの間、わたしは天と地と海と陸を揺り動かす。わたしはすべての国々を揺り動かす。すべての国々の願いはかなえられ、わたしはこの家を栄光で満たす。」と万軍の主は言われる。銀はわたしのものであり、金もわたしのものであると万軍の主は言われる。この栄光は

後の家は前の家よりも偉大になると万軍の主は言われる。また、わたしはこの場所に平和を与えると万軍の主は言われる。（ハグ記 2:6-9）

その時、その声は地を震わせましたが、今、神は約束してこう言われました。「もう一度、わたしは地だけでなく天をも震わせる。」この「もう一度」という言葉は、造られたもののように震わせられるものは取り除かれ、震わせられないものは残ることを意味します。（ヘブライ 12:26-27）

神は、聖別された者たちの器を通して轟音を響かせ、間もなく天（霊に導かれて歩む信者たち）、地（肉に導かれて歩む信者たち）、海（諸国と闇の王国）、そして乾いた地（不信者たち）を揺り動かし始めると告げられました。また、この轟音を通してすべての国々（すべての器）を揺り動かし、揺り動かされているこの民の願いが主のもとに届くとも言われました。このため、神はシオンで主を待ち望む真のキリストの体に祝福を注ぎ始め、彼らが主の栄光に満たされるようにしておられます。

それゆえ、主が揺り動かしておられるこの民の願いが主のもとに届くとき、主は彼らを、主の栄光を受けた民のもとに導き、彼らは主に避難を求める民の世話をするであろう。

イエスは、銀と金は神のものであると宣言されました。銀は贖いを、金は神の栄光、すなわち神性を象徴しています。つまり、主は贖い、また液体を通して栄光を与え、栄光を与えるのです。

主はまた、この終末の時のキリストの体の栄光は以前のものよりも偉大であり、この終末の時のキリストの体、すなわち神の軍隊に主が平安を与えるとも言われました。神が語っている平安とは不死である義の衣のことです。そして、この終末の時の真のキリストの体のメンバーは、主イエスから液体の火、すなわち後の雨を受けるとすぐに、地上にいる間もその平安を身にまとして歩むこととなります。初期の弟子たちにはこの機会がありませんでした。なぜなら、彼らは聖霊のバプテスマを受けた後も死ぬ可能性があったからです。また、この轟音により、岩の上に建てられていないもの、つまり私たちの中にある主イエスの権威に抵抗するものはすべて、ひび割れて取り除かれます。

主はシオンからほえ、エルサレムから声を発せられる。天（信者）と地（不信者）は震える。しかし、主はその民の希望となり、イスラエルの子らの力となる。こうして、わたしがあなたたちの神、主であり、わたしの聖なる山シオンに住まうことを、あなたたちは知るようになる。その時、エルサレムは聖地となり、もはや異邦人（悪霊）はそこを通り抜けることはない。（ヨエル書 3:16-17）

神の御霊が分離した者たちの器から轟き始めると、義に歩んでいない信者と不信者に裁きが下されます。しかし、主は御自身の民の希望、御自身の子らの力となります。分離した器は聖化され、彼らは神の臨在を自らの中に経験します。

悪霊は彼らの器を二度と通ることはありません。これは当然のことです。なぜなら、神が異邦人（悪霊）を器に通らせ続ける限り、誰も神の聖さの中を歩むことはできないからです。彼ら（悪霊）は、言葉、考え、あるいは行動によって、あなたを汚すに違いありません。そして、これは教会が後の雨を辛抱強く待っている理由を示しています。なぜなら、後の雨は死すべき性質を不死に飲み込み、肉体に対するサタンの力を打ち砕き、人が肉体において待ち望んでいた平安を得るからです。

三日目の朝になると、雷鳴と稲妻が起こり、山の上に厚い雲が立ち込め、角笛の音は非常に大きくなったので、宿営にいるすべての民は震え上がった。

モーセは民を宿営から導き出し、神に会わせた。彼らは山の麓に立った。シナイ山は完全に煙に包まれた。主が火となってその上に降臨されたからである。その煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。角笛の音が長く響き渡り、次第に大きくなったとき、モーセは声をもって彼に答えた。（出エジプト記 19:16-19）

これは、神がラッパのように叫んで陣営にいたすべての人々を大いに恐れさせたときに何が起こったかをはるかに明確に描写したものです。

雷鳴のような神の声の轟きに、山さえも震え上がった。これは、当時そこにいた普通の血肉の人々が、心の中でどのような思いを抱いていたかを垣間見せるものだった。神は降りてきた。

そうして彼らを試し、主への畏怖が彼らの前に立ち、彼らが主に対して罪を犯さないようにするためでした。その恐ろしい光景と音によって、彼らは求められることは何でもする用意ができました。反抗と不従順の精神が一時的に彼らから去ったからです。そして彼らは神とモーセを深く恐れ、神が直接語りかけてくださるよりも、過去に何度も侮辱してきたモーセから話を聞くことを選んだのです。

同様に、神がその油注がれた僕たちを通して叫ぶとき、それは敵からの差し迫った危険のためである可能性があり、その器を通してその危険や攻撃をもたらす悪魔は逃げるでしょう。そして、悪魔に使われている人は、まるで山が揺れたように震え、非常に恐れて、おそらく命からがら逃げ出すでしょう。

主は勇士のように出て行き、軍人のように嫉妬をかき立て、叫び、ほえ、敵に打ち勝つ。「私は長い間沈黙し、じっと身を慎んできたが、今、産みの苦しみを受ける女のように叫び、一斉に滅ぼし、食い尽くす。」（イザヤ42:13-14）主は、勇士のように御座から立ち上がり、私たちの内にある聖なる住まいから叫び、ほえると言われました。さらに、主は長い間沈黙を守ってきたとも言われました。また、これまで沈黙し、敵との交渉を控えてきたが、今、産みの苦しみを受ける女のように叫び、すべての敵を一斉に滅ぼし、食い尽くすとも言われました。人がほえることなどできるはずがありません。

聖霊の導きによって、攻撃を仕掛けようとする敵に打ち勝つことはできない。

彼らは主に従って歩み、主は獅子のようにほえる。主がほえる時、西から子孫が震える。(ホシヤ書11章10節)神は、私たちの聖なる器の中にある、神の聖なる住まいを通して獅子のようにほえると言われました。そして、主がほえ始めると、神の子孫はどこにいても震え始め、太陽が東から昇り、西に沈むように、西に集められます。この聖句と聖書の他のいくつかの聖句を通して、神は東への新たな動きのために軍勢を集め始めたことを示しています。しかし、太陽が西に沈むように、神はまた西に軍勢を集め、神の子ら、すなわち軍勢が顕現するための液体の火を注ぎ出すことで、その動きを終わらせようとしています。

そして彼は言いました、「主はシオンからほえ、エルサレムから声を発せられる。羊飼いの住まいは嘆き、カルメル山の頂は枯れる。(偶像崇拜の山々)

神の霊がシオン(荒野または彼らの隠れ家)にいる聖化された者たちの器からほとぼり出ると、羊飼い(牧師)の住まいは真剣な執り成しを始め、偶像崇拜のあった山々は枯れてしまいます。

最後に、咆哮を祈りの手段として捉え、咆哮とは何か、どのように咆哮できるか、そしてその咆哮によって祈る人が受ける影響と合わせて、

その祈りがどのように機能し、その祈りの対象となる人がどのような信仰を持っているかを見れば、それは敵の器に神への畏れを植え付けるために使われる真に審判の祈りであると結論付けることができます。

この轟音が何をもたらすか、あるいは何をするかについては、実に多くの例がありますが、一つ例を挙げましょう。1991年、私たちがまだ訓練中だった頃、ナイジェリアのエメネ・エヌグにあるアクブオガ・ファームズで、妻と数人の兄弟たちが住んでいた家に武装強盗が押し入りました。他の兄弟たちと、その敷地に住む人々は恐怖に襲われました。

妻は恐怖に襲われましたが、大きな叫び声を上げて飛び出しました。ドアをこじ開けていた強盗たちは、すべてを放り出して逃げ去りました。彼らは同じ地域の別の家に行き、その敷地内のほぼ全員を襲いました。妻と他の住人が住んでいる家にライオンがいると信じていたに違いありません。このことが妻と周囲の人々に大きな効果をもたらしたように、同じような状況や危険な出来事に直面した時、同じことをする人なら誰にでも効果があるはずで、妻は例外ではないのですから。

7

狡猾な女性とは誰なのか
そして、彼らの役割は何ですか？
教会？

狡猾さの意味を理解しなければ、この章を理解するのは困難です。なぜなら、多くの人が狡猾さを否定的に捉え、人を欺くための巧妙さとしてしか理解しないからです。しかし、それは決して間違っています。狡猾さには、人々が考えるよりも大きな、あるいは深い意味があるからです。「狡猾さ」という言葉はヘブライ語のchakamで、khaw-kawnと発音されます。これは「賢い（つまり、知性があり、巧妙で、狡猾な）」、狡猾な、巧妙なという意味です。この狡猾さの理解があれば、神が「狡猾な女たちを呼びなさい」と言ったとき、神が人間が知っている、あるいは理解している狡猾さとは異なる見方をしていることが分かります。

万軍の主はこう言われる。「よく考えて、嘆き悲しむ女たちを呼び寄せ、狡猾な女たちを呼び寄せ、彼らを呼び寄せよ。急いで我々のために泣き叫べ。我々の目から涙が流れ、まぶたから水があふれ出る。シオンから泣き叫ぶ声が聞こえる。我々はなんと滅ぼされたことか。我々はひどく打ちひしがれている。なぜなら、我々は

わたしたちの住まいがわたしたちを追い出したので、わたしたちは地を捨て去った。
しかし、主の言葉を聞きなさい。女たちよ。主の口から出る言葉を
耳に留め、娘たちに嘆きを教え、隣人たちに嘆きを教えなさい。

(エレミヤ9:17-20)

この聖句は、神が嘆き悲しむ女たち（すなわち、優れた執り成しの器、あるいは神の憐れみを自ら引き寄せる術を知っている器）を求めておられると述べています。彼女たちは教会のために巧みに嘆き（悲痛な叫び）を取り上げ、彼女たちの目から涙が流れ、会衆全体も嘆き悲しむようになり、神の憐れみが解き放たれるのです。神はまた、神の奉仕者たちに、この世の体制から離れた神の子どもたちに、どのように嘆き、どのような状況においてもどのように神の憐れみを引き寄せるかを教えるよう求めておられます。この章を構成する問い、「狡猾な女とは誰か？」に立ち返ると、万軍の主がこの聖句の中で答えを与えておられることがわかります。ですから、狡猾な女とは、嘆き悲しむ女のことです。先ほど説明したように、嘆き悲しむ女性とは、肉体的な女性だけを指すのではなく、男性も女性も、少年も少女も、主への奉仕に全身全霊を捧げ、良き執り成しとして、神の憐れみを自分自身や、神が裁きを下された人々に引き寄せる方法を知っている女性を指します。彼女たちの嘆きや嘆きを通して、神は御心を変えてくださるでしょう。二つ目の質問は、教会における彼女たちの役割は何でしょうか？

彼ら自身と教会のために、隙間を埋めて執り成しをするので
す。神が民に裁きを下すと決断されるたびに、彼らはしばしば
憐れみと執り成しの御霊に動かされ、巧妙に、賢く、知性的に、
祈りの中で神と格闘し、神の考えを変えようとします。そして、
彼らがいなくなると、問題が生じます。なぜなら、彼らはこの
職務に就くための神からの賜物、つまり油注ぎを受けているか
らです。エゼキエルはかつて、神がイスラエルを罰することに
決めた理由を彼に説明された時、それを経験しました。

わたしは彼らの中に、垣を造り、わたしの前に裂け目を設け
て、わたしがそれを滅ぼさないようにする者を求めたが、見つ
からなかった。それゆえ、わたしは憤りを彼らに注ぎ、わたしの
怒りの火で彼らを焼き尽くし、彼らの行いを彼らの頭上に報
い、と主なる神は言われる。

(エゼキエル22:30-31)

神が、その土地のために立ち上がる者は誰もいないと言った
意味は、当時のイスラエルの中に、神の考えを変える巧みな方
法を知っている優れた仲介者が見つからなかったということ
である。
当時、執り成しをする者はいたかもしれませんが、嘆きの意味
とそれが神の心にどう触れるかを知り尽くした、巧みで熟練し
た執り成しをする者はいませんでした。これは今日の教会に
欠けている最も重要なことの一つです。多くの教派や聖職者
は、この欠けている環を理解していると信じ、祈りの戦士や執
り成しの組織を設立することで、肉体的に執り成しをしようと
しています。

喪に服す女性のこのオフィスに立つグループまたはチーム。
まあ、彼らは善意を持っていますが、聖霊の導きによってそれを実行していません。
なぜでしょうか？それは、この職務に就くには、神との契約関係にあり、そのための油注ぎを受けなければならないからです。神との契約関係について言えば（私の著書『Christian Race To The End, Qualification For The Throne』を参照）、それは嘆きを通して神と格闘する方法を教えらるための最初のステップです。泣くことさえできないのに、どうすればいいのかと尋ねる人もいるかもしれません。パウロ兄弟は、「ですから、私はあなたに思い出させましょう。私の手を置くことによってあなたの中にある神の賜物を、燃え立たせなさい。」（II テモテ1:6）と言ったとき、その意味を理解していました。聖霊の

バプテスマを受けて新しい言語で話し始めたとき、あなたは油注ぎ、つまり様々な言語で祈る賜物を受けました。人間や天使の言葉とは別に、それらの言語の多様性には、うめき、泣き、苦しみ、嘆き、うなり声、わめき声などがあります。祈りにおいては、すでに受けているこれらの霊的な方法で祈る賜物を奮い立たせ、聖霊に身を委ねる以外に、特別な儀式によってもたらされるものは何もありません。うめき、苦しみ、そして泣き声にあるように、嘆きにもそれはあります。では、嘆きとは何でしょうか？嘆きはヘブライ語でNehiy、発音はNeh-heeで、嘆きを意味します。したがって、嘆きとは、深い悲しみ、深い悲しみ、または後悔を示す、感じる、または表現することを意味します。それは

深い悲しみに暮れ、神に自分の問題を甲高い声で訴える人の、慈悲深い叫び。預言者サムエルの母ハンナは、神の慈悲をいつ、どのように引き寄せべきかを知っており、心の望みを叶えた、抜け目のない女性の好例です（参照：サムエル記上1:1-20）。モーセもまた、イスラエルと神の間に立ち、イスラエルを赦すために神と格闘した際に、この抜け目のない女性の役割を果たしていたと言えるでしょう。

あなたたちは大きな罪を犯しました。今、私は主のもとへ行き、あなたたちの罪を償おうと思います。モーセは主のもとへ帰って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯し、金の神々を造りました。しかし今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら、どうか、あなたが書き記したあなたの書物から私を消し去ってください。」主はモーセに言われた。「わたしに対して罪を犯した者は、わたしの書物から消し去ろう。」

それゆえ、今、わたしがあなたに告げた場所へ民を導きなさい。見よ、わたしの天使があなたの前を行く。しかし、わたしが訪れる日に、わたしは彼らの罪を罰する。（出エジプト記32:30-34）

信じられないことです。なぜなら、ここでモーセは、もしイスラエルを赦すことができないなら、自分の名を生命の書から消し去るよう神に告げていたからです。イスラエルが神に対して許し難い罪を犯したことをモーセは知っていましたが、神の恵みを得るための巧妙な方法に自信があり、その願いを聞き入れてもらうためなら自分の地位を犠牲にする覚悟でした。一方、神はモーセの執り成しを尊重し、こう告げました。

モーセはイスラエルの民を導き続けましたが、神が彼らの罪を罰する日には、神は依然として彼らの罪を罰するでしょう。

主がこのように言われたのは、彼らが主に対して罪を犯し続けることを知っていたからです。モーセ自身が彼らへの裁きを命じ始めるまで、そして神はモーセのように御自身の行為を止めることのできる者は他にいないでしょう。モーセは彼らを救うために、執り成しを続けながら、このように更なる努力を続けました。

主はモーセに言われた。「この民はいつまでわたしを怒らせるのか。わたしが彼らの間に示したすべてのしるしを彼らがいつまで信じないのか。わたしは彼らを疫病で撃ち、彼らを相続地から追放し、あなたを彼らよりも強い大いなる国民とする。」モーセは主に言った。「そのとき、エジプト人はそれを聞くでしょう。あなたは御力をもってこの民を彼らの中から導き出されたからです。彼らはこの地の住民に告げ知らせるでしょう。彼らは、あなたがこの民の中におられ、あなたが顔と顔を合わせて現れ、あなたの雲が彼らの上にとどまり、昼は雲の柱、夜は火の柱となって彼らの前に進まれることを聞いたからです。」もしあなたがこの民を一人のように皆殺しにするならば、あなたの名声を聞いた諸国の民はこう言うでしょう。「主はこの民を、彼らに誓われた地に導き入れることができなかつたため、荒野で彼らを殺したのだ。」今、私はあなたに懇願します。あなたが言われたように、私の主の力が大きくなりますように。「主は忍耐強く、慈しみ深く、咎と背きを赦し、

罪人を無罪放免にすることはできず、父祖の罪を三代、四代まで子孫に報いることとなります。どうか、あなたの大いなる慈悲によって、この民の罪をお赦しください。あなたがエジプトから今に至るまで、この民を赦してきたように。

すると主は言われた。「あなたの言葉に従って、わたしは赦した。」
(民数記14:11-20)

私はこれらの箇所の下線を引いた。それは、この偉大で狡猾な仲介者が、神に対する反抗が続いたためにイスラエル全体を滅ぼすという神の決断の結果を思い起こさせるために、どのように神の前に立ったかをより明確にするためである。

モーセは、その結果の一つとして、エジプト人とその周囲の異教徒たちが神を大いに嘲笑した、つまり彼らをエジプトから連れ出し、約束の地へ導くと誓った神がその約束を果たせない、と述べた。こうしてモーセは神の言葉を神に返し始めた。神は深く憐れみ、「あなたの言葉に従って赦します」と言われた。こうしてモーセの嘆かわしい言葉は、イスラエルに対する神の邪悪な思いを悔い改めるきっかけとなった。

それゆえ、万軍の神、主はこう言われる。「すべての街路に嘆きの声が響き、すべての大通りで人々は『ああ、ああ』と叫ぶ。農夫（神の僕たち）は嘆き（執り成し）に呼ばれ、嘆きを巧みに行う者たちは嘆き（悲嘆の叫び）に呼ばれる。すべてのぶどう園（教会）で嘆きの声が響く。わたしはあなたを通過するからだ、と主は言われる。」（アモス書 5:16-17）

主は、神の奉仕者たちと嘆きの達人たちが執り成しに召され、街路や大通りで嘆きの声が聞こえる時、彼らは主に嘆きの叫びを上げるだろうと言われました。また主は、すべての教会、すべての器が、主がそこを通過する時、嘆き始めるとも言われました。主がここですべての教会の嘆きの叫びについて語っておられることの好例は、ここでの彼らの執り成しに見ることができるでしょう。

主の使者である祭司たちは、玄関と祭壇の間で泣き、こう言いましょう。「主よ、あなたの民を憐れんでください。あなたの嗣業を、異邦人に支配されるような辱めにしないでください。なぜ民の間で、『彼らの神はどこにいるのか』と言わなければならないのですか。主はご自分の国をねたみ、ご自分の民を憐れんでくださるでしょう。」（ヨエル書 2:17-

18)。

これは、神の民が、神の憐れみを自らに引き寄せようと、胸を痛めるような、あるいは狡猾な手段を用いて主に嘆き始めたときの嘆きの言葉です。彼らにとって、神の動きを止め、自分たちの名ではなく神の名が危機に瀕していること、そして異教徒が自分たちを救うことなどできないと嘲笑うのは神であることを示して、神に迅速な行動を起こさせることは容易です。

ダビデは狡猾な女性とも言えます。サムエル記下24章1-19節と歴代誌上21章1-18節には、彼の罪がイスラエルに大きな疫病を引き起こした時の彼の反応が見取れます。ダビデは悪魔に欺かれ、ヨアブにイスラエルの民を数えるよう命じました。神に対するダビデの罪は、

イスラエルの子らを数えた動機と、出エジプト記 30:11-16 で神が命じたように、数えられた者全員から聖所のシェケルに従って半シェケルを取るようにヨアブに命じることができなかったことの両方。

ダビデの動機は、自分の軍隊の兵力と数を把握したかったことであり、そうなれば神の恵みよりも人間の能力に頼ることになる。この過ちの後、ダビデは自分の行いを悟り、悔い改めた。しかし、神の災いが続く中、天使がエルサレムに向かって手を伸ばしているのを見て、ダビデは再び嘆き悲しんだ。

ダビデは目を上げて、主の使いが地と天の間に立っているのを見た。その使いは抜き身の剣を手に持ち、エルサレムの上に差し伸べていた。

そこでダビデとイスラエルの長老たちは皆、荒布をまとってひれ伏した。ダビデは神に言った。「民を数えよと命じたのは私ではありませんか。この私こそ罪を犯し、悪を行ったのに、これらの羊たちは一体何をしたというのですか。主なる神よ、どうかあなたの御手を私と私の父の家の上に置き、私の民の上には置かないでください。そうすれば、彼らは災いに見舞われることはありません。」（歴代誌上21:16-17）

ダビデは民に深い憐れみを抱き、真剣な執り成しの働き手として、主に嘆き悲しむ声をあげ、イスラエルではなく自分と父祖の家を罰してくださいと神に訴えながら、断食と祈りを捧げました。これは、喪に服す女性に期待される、非常に善良で意義深い役割です。

彼は自分の家族や父親が

ダビデの家は被害を受けなかったものの、彼は被害を受けた人々の家族以上に深い苦しみを感じていました。そこで彼は、イスラエル人の代わりに自分と父祖の家を罰するよう神に願いました。この出来事は神のイスラエルへの憐れみとなり、神はダビデに彼らのために罪を償うよう命じました。

最後に、聖書に見られるように、狡猾な女性は、今日の宗派の執り成しをするグループが行うような利己的な行為には決してなりません。彼らは自分の家族と教会の幸福だけを祈り、無知にも苦しむ他の人々を運命に任せているのです。狡猾な女性、あるいは執り成しをする人は、仲間の人間、あるいは自分が代弁する人々が経験していることの影響を深く理解しています。

8

戦いの祈り

祈りについてのこの長くて素晴らしい教えの後で、戦いの祈りについてもう少し明らかにしないのは不公平でしょう。多くの人がうめきや苦しみなどを全く愚かなことと見なすので、愚かに聞こえるかもしれません。信者の中には、神の聖職者でさえ、戦いの話になったら護衛として警備員を手配するか、銃を持ち始めるかのいずれかだと思うかもしれませんが、決してそうではありません。聖霊がパウロ兄弟を用いて教会に前もって警告し、「私たちは肉にあって歩んでいても、肉に従って戦っているではありません。私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神によって力強く、要塞さえも打ち倒します。私たちは、さまざまな思いや、神の知識に逆らって高ぶるすべてのものを打ち砕き、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させます。」（コリント人への第二の手紙10章3～5節）

この聖句はそれをより良く説明しています。なぜなら、神が私たちに与えてくださった闇の使者と戦うための武器は、警備員や銃といった肉体的な武器ではなく、敵のどんな要塞も打ち倒す強力な武器だからです。私がさらに明らかにする前に

この章では、戦争 (warfare)が何を意味するのかを考えてみましょう。戦争のより良い意味は、戦争の意味を理解することによってのみ理解できます。戦争とは、武器、戦略、戦術を用いて戦うための知識、または技術です。したがって、戦争 (Warfare)という言葉はギリシャ語のstrateuomaiで、strat-yoo-om-aheeと発音され、軍事作戦に従事することを意味します。これは比喩的に、使徒職 (困難な義務と機能を伴う)を遂行すること、肉欲と闘うこと (つまり、空手の練習や試合をしているかのように手、頭、足、または体を曲げたり、かがめたりすること)を意味します。これをおかしいと言う人もいるかもしれませんが。なぜなら、誰も、または何かに当たらずに空手の方法で戦うことができるのでしょうか?答えは簡単です。空手を習う人の中には、修行や学習の段階では、誰かを殴ったり、何かの物を打ったりするわけではありません。しかし、何かを打つ、あるいは自己防衛の手段として、空中で手や足、さらには体を動かす人もいます。この空手の競技を導入したサタンは、霊の法則を熟知していることを忘れてはなりません。なぜなら、彼はこの物質的な地球と人間が創造される何百万年も前から、神と聖なる天使たちと共にいたからです。この創造後も、彼は第二の天に留まり、空手という悪魔の霊を通して人類に導入したこの戦争の仕組みを熟知しています。彼は霊界のあらゆるものを模倣し、肉体的な方法で人類に導入しているので、聖書に基づく説明や例を挙げる前に、

戦争について、ここで問いたい。私たちは誰と戦っているのか？多くの知識人が問いたくなるような質問を、私は自分自身に問いかけるのが好きです。そうです。聖霊は使徒パウロにエペソ人への手紙の中でこう書かせたように、その答えを持っています。

私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配、権威、暗黒の世界の主権者、また天にいる悪の霊に対する戦いなのです。（エペソ6:11-12）

信者、そして神の奉仕者でさえも、海の霊、淫行、姦淫、怒り、憎しみ、嫉妬、苦悩、死、暴力、恐怖、魔術、魔術、階層の霊などとの闘いに費やす時間は無駄であることを認識すべきです。なぜでしょうか？それは、これらの霊は人々の問題ではなく、真摯なクリスチャンの人生にさえ大きな影響を与えないからです。時折、独善的な不信者の中には、これらの小さな悪霊の影響を受けていない人もいます。主な戦い、あるいは戦争は、天に住むサタンとその支配者たち、そして権力者たちとの戦いです。

この世界には、墮天使によって支配されている暗い場所もあります。墮天使は後に、第三の天国からサタンとともに送り出された闇の邪悪な天使に変わりました。

彼らは、人間、動物、魚、鳥の体に宿る無形の悪魔の霊を操り、天界からこれらの悪魔の行動を指示します。そして、もしあなたがそれらの小さな悪魔を、その主人に対処せずに追い出すと、主人はさらに多くの悪魔を送り返し、同じ機能を実行させます。彼らはまた、

大陸、世界の国々、都市、町、村、国連、アフリカ連合（OAU）、欧州経済共同体（EEC）、西アフリカ経済共同体（ECOWAS）などの組織、国家元首、海洋、河川、惑星系、宗教団体などを支配しています。誰かの真似をしているわけではありませんが、本書を読むすべての人に明確にしておきたいのは、サタンには7つの王国があり、そこで活動しており、これらの王国は彼の君主たちによって支配されているということです。これらの王国の中にも、先ほど述べたように、サタンは悪魔的な活動の別の側面を持っています。この王国の問題に関して、私の主張を裏付けるために聖句を引用しましょう。なぜなら、「王国はどこにあるのですか？」と言う人がいるからです。

また、天にもう一つの不思議なものが現れた。見よ、大きな赤い竜がいた。七つの頭と十本の角があり、その頭に七つの冠をかぶっていた。（黙示録12:3）

天の不思議とは、サタンとその間の手先が活動する第二の天のことです。赤い竜は、サタンの戦争本性を表しています。なぜなら、赤は血の象徴であり、これはサタンが戦争などを通して流す人類の血だからです。七つの頭は、バチカン市国が位置するバチカンの七つの丘のことです（黙示録17:9参照）。ここは、サタンが長年にわたりこの世の宗教組織を支配し、今も支配し続けている都市です。十本の角は、現在の欧州連合を構成する10のヨーロッパ諸国で、後に連合国家を形成します。そして七つの冠は、サタンとその手先が活動する七つの王国です。これらの君主国を知ることの本質とは何かと問う人もいるかもしれませんが、結局のところ、それは本質ではありません。

神の言葉とは？愛する兄弟たちよ、あなたたちはそれを知らなければなりません。それは神の言葉の一部です。もしあなたたちがそれを知らないなら、サタンとその手先たちはあなたたちの人生を操り、支配し続け、あなたたちは決して神の子として成長することはできません。だからこそ、パウロ兄弟はこう言いました。「それは、世の初めからイエス・キリストによって万物を創造された神に隠されていた奥義の交わりがどのようなものであるかを、すべての人に明らかにするためです。それは、今や天にある支配と権威に、教会を通して神の豊かな知恵が知られるようになるためです。」（エペソ3:9-10）

天に住むこれらの支配と権力を取り巻く奥義が、世の初めから隠されていたことが、今、お分かりいただけたでしょうか。誰によってでしょうか？神によって、そしてなぜ神はそれらを隠しているのでしょうか？それは、人類が知識の探求と墮落した性質の中で、悪魔とその手先と敢えて戦うからです。そして悪魔は、アダムの墮落した性質で、自分と戦う者を一瞬たりとも打ち砕きません。これはまた、罪の中で生きる未信者や信者にとって、罪深い人生でサタンとその支配と権力との戦いに身を投じるという過ちを犯す必要がないという警告ともなります。神はイエスが来られるまで待ち、悪魔を退け、人間が受け継いだアダムの罪深い性質を、イエスを受け入れた者たちのための神の性質へと変えられました。だからこそパウロは、エペソ人への手紙3章で、教会がイエスの血によって買い取られた今、

彼女は今、これらの君主や権力について知り、それらと戦うことができます。あなたは、知っている敵は知らない敵よりも優れていると分かります。なぜでしょう？それは、知っている敵は抑えることができるからです。しかし、知らない敵は、その代理人を通してあなたを知っており、監視しており、あなたを食い物にする傾向があります。ですから、あなたはそれらを知る必要があります。私は君主や権力について教えるつもりはありませんが、参考になるものをいくつか挙げたいと思います。ヨブ記41章とイザヤ書27章1節で語られているリヴァイアサンの君主、旧約聖書で働き、黙示録2章20-23節に記されているように今も働いているイゼベルの霊、パリサイ人を通して働き、今も多くの神の僕を通して働いているパリサイの霊があります。これは福音書にも記されています。創世記4章1節でカインを通して働いたカインの霊があります。

15 そして、多くの信者が今、兄弟たちを裏切り、兄弟たちとの契約を破り、彼らに対して冒瀆的な言葉を吐くことで、彼らを苦しめています。カインの霊の影響を受けた信者たちのこうした行為は、神に対して罪を犯し、神の呪いを受けることにつながります。そして彼らは逃亡者、放浪者となり、ある宗派から別の宗派へ、あるいはある神の人から別の神へとさまよい歩き、問題の解決策を探し求めています、見つけることができません。その理由は、彼らが兄弟たちとの間に結ばれた兄弟愛の契約を破ったからです。

そして、彼らが悔い改めてその契約に戻るまで、彼らは

時間を無駄にしている。なぜか？それは、神は契約を破る者ではなく、契約を破る者とは何の関係もないからだ。黙示録17章1-6節には、信者も不信者も霊的・肉体的な淫行、姦淫などに導く淫行の霊が記されている。

それらの数は非常に多いですが、これらは、あらゆる君主国や権力と戦うための連絡拠点として存在するはずだ。

どうして戦争ができるのか？

この質問には、詩篇作者の詩をいくつか引用して答えたいと思います。

主はわたしの手に戦いを教えられるので、鋼鉄の弓もわたしの腕によって折られる。(詩篇18:34)

わたしの力である主が祝福されますように。主はわたしの手に戦いを教え、わたしの指に戦いを教えられます。(詩篇144:1)

鋼鉄の弓は、君主国や権力を表しており、詩篇作者が語っているのは、私が空中の空手の形で、自分の手と指を使って戦うとき、人類に住む地上の肉体のない霊に対する君主国や権力の力、紐、および操作を断ち切ることができ、小悪魔たちは命からがら逃げ出すだろうということです。

私がこれらの悪魔を「肉体を持たない」と呼ぶのは、彼らの魂の体は地獄で苦しんでいるため肉体を持たないからです。しかし、君主や権力は墮天使であるため肉体を持っています。私が聖書から挙げた例をいくつか挙げてみましょう。

つまり、それらの君主たちの権力と絆を断ち切り、それによって小悪魔たちが命からがら逃げ出すようにするのです。

ダビデは石投げと石でペリシテ人に打ち勝ち、ペリシテ人を打ち倒した。しかし、ダビデの手には剣がなかった。そこでダビデは走り寄り、ペリシテ人の上に立ち、彼の剣を奪い、鞘から引き抜いて、彼を殺し、その剣で首をはねた。ペリシテ人は勇士が死んだのを見て逃げ去った。（サムエル記上17:50-51）

この聖句は、私が君主国とあの小さな悪魔たちについて言いたいことをはっきりと説明しています。ダビデがペリシテ軍の指揮官ゴリアテを討ち滅ぼした瞬間、ペリシテ軍の残りの兵士たちは逃げ惑いました。なぜでしょうか？答えは簡単です。リーダーが殺されたのを見た瞬間、彼らはダビデとイスラエル軍との戦いにおいてどのように行動すべきか分からなくなり、皆逃げ出したのです。誰かが彼らの司令官（つまり君主国や勢力）と激しい戦いを繰り広げ、彼らを敗走させた場合、これらの悪魔たちも同じように逃げ惑うでしょう。だからこそ、詩篇作者はこう言ったのです。「主は正しく、悪者の綱を断ち切られる」（詩篇129章4節）。

高慢な者たちはわたしのために罿を仕掛け、縄を道端に張り、わたしに罿を仕掛けた。
（詩篇40:5）

悪人は自分の不義に捕らわれ、自分の罪の縄で縛られる。
(箴言5:22)

災いあれ、彼らはむなしい綱で不義を、車の綱で罪をひく者
となる。(イザヤ書 5:18)

詩篇作者、ソロモン、イザヤがこれらの聖典で言及しているこ
れらの紐、綱、ジン、荷車のロープは、蜘蛛などが食料として使
う小さなハエを捕らえたり捕まえたりするために使う巣の形を
した罫のことを言っています。

しかし、霊界では、これらの君主国や権力は、その繋がりを利用
して犠牲者を精霊の悪魔に縛り付け、その結果、無力な犠牲者
の人生は、上からの指示に従って行動するこれらの悪魔によっ
て支配されることとなります。人々が祈り続け、縄や綱、ジン、荷
車のロープを切断して君主国を攻撃することなく、これらの悪
魔を追い払おうとしたとしても、君主国は同じ縄などを使って
さらに多くの悪魔を送り込み、活動させるのです。

最後に、あなた方の戦いにおいて、あなた方はこれらの支配権、
権力、この世の闇の支配者、そして天界に住む霊的邪悪にイエ
スの血を注ぎなさい。あなた方が知っている、あるいは私が先
に接触点として挙げた者たちの名前を挙げなさい。また、サタ
ンの王国、これらの闇の代理人たちの王座、そして彼らの活動
領域すべてにイエスの血、あるいは聖霊の火を注ぎなさい。そ
して、空手の練習のように、手と指を空中に打ち付け、轟音や大
きなうめき声で彼らと戦いなさい。そして、彼らの縄、綱、ジン、
荷車のロープ、そして彼らのすべてのものを断ち切りなさい。

あなたの人生（霊的、肉体的、経済的、物質的、結婚生活、健康面）に対する作戦、そしてあなたが祈っている人々の人生に対する作戦を封じなさい。そして、あなたや他人の人生を操作したり、操ったりしている小悪魔を縛り、底なしの穴に投げ込みなさい。また、サタン人間エージェントがあなたやあなたが祈っている人々に送り込んだものはすべて、彼らに返してください。これは毎日、特に夜間に行う必要がありますが、もう一度警告しますが、罪を犯している場合、または罪深い生活を送っている場合、またはまだ新しく生まれ変わっていない場合は、このような種類の戦いの祈りを試みないでください。この点を強化するために、聖書の例を1つ挙げます。使徒言行録第19章の使徒パウロは、アラビアの砂漠で訓練を受けた後、聖霊によって油を注がれ、宣教の任務を委ねられ、宣教のために野外活動を行っていました。そして彼が説教しているとき、神はしるしと不思議によって彼の言葉を確認し、大きな奇跡が起こりました。イエスの名でどんな悪霊でも呼び出せば、縛れば、その悪霊は逃げると信じていたユダヤ人たちが、悪魔を試そうとしました。それは、今日多くの牧師たちが説教しているのと同じで、イエスの名を呼び出せば、どんな悪霊でもイエスの名で縛れば、その悪霊は逃げるか降伏するか、改心するかどうかは関係ありません。

案件。

そのとき、放浪するユダヤ人たち、悪魔払い師たちが、悪霊に取りつかれた者たちに主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによってあなたたちに命じる」と命じた。ユダヤ人スケワの七人の息子がいた。

祭司長たちはそのように言った。すると悪霊は答えて言った。「イエスは知っている。パウロも知っている。だが、あなたがたはいったい何者だ。」悪霊に取りつかれている男は彼らに飛びかかり、彼らを打ち負かして打ち負かしたので、彼らは裸で傷を負ってその家から逃げ出した。(使徒行伝19:13-16)

私が言いたいことがお分かりでしょうか。まだ回心していない、あるいは主イエスを自分の主、救い主としていないのに、イエスの名によって悪霊を縛ろうとするのは危険なことです。私は誰かを騙したり怖がらせたりしようとしているわけではありません。だからこそ、聖句を用いて自分の主張をより明確にしているのです。使徒パウロがどのように回心し、どのような訓練を受け、どのように聖霊によって油注がれたのかを知らずに、パウロを真似しようとした人たちのように、誰にも真似をしないでください。パウロが主によって異邦人の偉大な使徒とされるまでのこれらの過程はすべて、悪魔にも知られていました。スケワの子らが祈っていた男に宿った悪霊が、「イエスは知っている。パウロは知っている。だが、あなたたちは一体何者だ？」と言った時、悪魔はそれを認めました。悪魔はあなたをよく知っています。あなたがどんな生き方をしているのかを知っているのです。もしあなたが改心していない、あるいは罪深い生活を送っているなら、彼はそれを知っています。なぜなら、あなたの今の生き方を促しているのは彼の悪霊であり、彼らはいつでも彼に報告するからです。ですから、私は長年この種の祈りを経験してきた主の弟子として、あなたに真剣に警告します。

9

神が教会に期待していること 今やるべきこと

以前私の本（『終わりまでのクリスチャンの競争（王座への資格）』）で述べたように、教会は霊的な意味での女性であり、サタンの頭を砕き、第二の天の王座から彼（サタン）をこの地上に投げ落とすための種（神の言葉または男の子）を生み出すという使命を神から与えられています。教会はまた、王、祭司としてキリストと共に統治する私たちの主イエス・キリストの体であり花嫁でもあります。わずかな残りの者を除いてキリスト教世界を含む全世界が大背教へと向かっているこの激しい時代に、神は今教会に何をすることを期待しているのでしょうか。この重要な質問には、神を真に崇拝する者の心に平安をもたらさず、理解しやすい聖書の裏付けのある明確な答えが必要です。

主は山上の説教で教会の人々にこう言われました。「あなたがたは地の塩である。もし塩がその味や香りを失ってしまったら、何によって塩味をつけることができようか。もはや何の役にも立たず、外に捨てられて人々に踏みつけられるだけである。」（マタイ5:13）

塩の香りは味覚であり、主は教会を地の塩と言われたので、教会の香りは愛です。そして、人が愛のうちを歩むなら、律法を全うしたことになります。これは、教会が神への愛を失うと、何の役にも立たなくなり、神の御前から追い出され、人々に踏みつけられることを意味します。これは、夫への愛を失った女性にも当てはまります。女性は夫との愛を満たすために家に留まることをやめ、他の男性に情欲を抱き始め、外出を望みますが、必ずしも他の男性との愛を満たすのではなく、姦淫を犯し、夫を裏切るようになります。主イエスは、この終わりの教会時代における教会の状態について、深刻な警告を与え、こう続けて言われました。

そして不法がはびこるので、多くの人の愛は冷えるであろう。（マタイ 24:12）

しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるでしょうか。（ルカ 18:8）

しかし、あなたに対して少し恨みがある。あなたは最初の愛を捨ててしまったからだ。だから、あなたはどこから落ちたのかを思い出し、悔い改めて、最初の行いをしなさい。そうしなければ、わたしはすぐにあなたのところに来て、あなたの燭台（神の霊）をその場所から取り去るだろう。（黙示録 2:4-5）

主イエスは、肉体を持っていた時代に教会に、背教の時代が到来し、大いなる不義が解き放たれると、信者の大多数が信仰を失うであろうと語られました。

悪魔は教会を惑わし、欺くためにこの世に注ぎ込んできました。そして主の常として、多くの信者がどんな困難にも屈せず主に従い、主の御前に留まり、忍耐強く主を待ち、交わりの中で主と交わり、主の導きを受け入れることで抱く愛は冷えていくと主は言われました。そのため、世界中の信者のほぼ90%が、最初の愛（神の御前に留まり、神の御心を求めること）を捨て、この世とその体制に身を委ねてしまいました。そして、これは彼らをこの世の体制の君と姦淫し、平和の君との結婚に反する不誠実な行いをさせています。それゆえ、神の霊は神の民に、立ち返って最初の業（愛）を行うように、さもなければ神の器から完全に去ってしまうと叫んでおられます。大多数の信者は、主への愛が冷えてしまったため、主イエス・キリストの救いの力に対する信仰を失い始めています。彼らは主を辛抱強く待つことができず、主と共に苦しむ覚悟がありません。彼らは主と共に苦しむことは神を見失った結果であると信じています。そして、キリストと共に苦しむことに同意する人々を見ると、それを嘲笑します。彼らが聞いた神の言葉のために苦難や迫害が起こると、彼らは主に憤慨し（マタイ13:20-21参照）、神が命じられたことを決して行う覚悟ができません。そして彼らは、主がマリアの道ではなく、マルタの道を歩んできました。マリアは、主から取り去ることのできない良い部分として受け入れられた道です。

教会が答えるべき大きな問いは、神は今、教会に何を期待しているのか、ということです。この問いに正しく答えるために、エリヤが天に召される前に、エリヤとエリシャの間で起こった出来事を振り返ってみましょう。

さて、主がエリヤをつむじ風で天に上げようとしたとき、エリヤはエリシャと共にギルガルから出発した。エリヤはエリシャに言った、「どうぞ、ここにとどまっています。主はわたしをベテルにつかわされました」。エリシャは彼に言った、「主は生きておられます。あなたの魂も生きておられます。わたしはあなたを離れません」。こうして彼らはベテルへ下って行った。ベテルにいた預言者の子らがエリシャのもとに出て来て、「主がきょう、あなたの主君をあなたの頭から取り去られることをご存じですか」と言った。エリシャは言った、「はい、知っています。黙っていなさい」。エリヤは彼に言った、「エリシャよ、どうぞ、ここにとどまっています。主はわたしをエリコにつかわされました」。エリシャは言った、「主は生きておられます。あなたの魂も生きておられます。わたしはあなたを離れません」。こうして彼らはエリコへ行った。

エリコにいた預言者の子らはエリシャのもとに来て言った。「主が今日、あなたの主君をあなたの頭から取り去られることをご存じですか。」エリシャは答えた。「はい、知っています。黙っていなさい。」エリヤは彼に言った。「ここにとどまっています。主は私をヨルダン川に遣わされました。」エリヤは言った。「主は生きておられます。あなたの魂も生きておられます。私はあなたを離れません。」こうして二人は出発した。

預言者の子らのうちの五十人が出て行って、遠くから見張っていた。二人は、ヨルダン川のほとりに立っていた。エリヤは外套を取り、それを巻いて、

水を分けて、あちこちに渡ったので、二人は乾いた地面を渡った。彼らが渡り終えると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたから取り去られる前に、何をしたらよいか尋ねなさい。」エリシャは言った。「どうぞ、あなたの霊の二倍がわたしの上にあるようにしてください。」エリシャは言った。「あなたは難しいことを尋ねるが、わたしがあなたから取り去られるとき、もしあなたがわたしに会ったら、そのとおりになる。もし会わなければ、そうならない。」

彼らがまだ歩きながら話していると、見よ、火の戦車と火の馬が現れて、彼らを分けた。そしてエリヤは旋風に乗って天に昇った。エリシャはそれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車とその騎兵よ」と叫んだ。しかし、彼は二度とエリヤを見ることができず、

彼は自分の着物をつかみ、それを二つに裂いた。また、エリヤの落ちた外套を拾い上げ、引き返してヨルダン川の岸边に立った。（列王記下 2:1-13）

エリヤとエリシャは、主イエスとその教会にたとえることができます。そしてこの章では、エリヤは携挙とでも言うべき形で天に召されようとしていました。これは、聖書研究者や神の奉仕者としてエリシャよりも信仰において年長であったエリシャと預言者の子らに知られていました。預言者の子らにとって、それは隠されたことではなく、彼らはそれを知っており、エリシャを含む人々に正確に預言することさえできました。しかし、エリシャはそれを知っただけでなく、自分が何をすべきかも知っていました。そのため、彼はすべての人々に告げ続け、いかなる妨害も望んでいませんでした。

預言者の子らは、どこへ行っても彼に預言していたので、黙っていた。エリシャのような預言者の子らは、師であるエリヤの指導を受けていた弟子であり、エリヤは最後の旅立ちの前に、監督していたすべての支部に感謝の訪問をしていた。

神の軍隊、陣営から分離してシオンにいる者たちを代表するエリシャは、重要なのは主人エリヤの携拳ではなく、エリヤが代表する神の御前に留まることができれば、主人を天に召し上げることを可能にしたのと同じ油注ぎを受けることができ、彼もまた奉仕の務めを終えた時に天に召されるであろうことを知っていました。預言者の息子たちは、シオンの地で神の信者であり奉仕者のような存在でした。

陣営にいた者たちは、エリヤの油注ぎを受け、牧師としての働きを終える時に引き上げられるために何をすべきかという啓示を受けていませんでした。彼らはエリヤが連れ去られることだけを知っていました。それは、信者も教派の牧師たちも携拳が迫っていることを知っているのと同じです。しかし、携拳の前に火による洗礼が行われること、そして洗礼を受けるために何をすべきかを知らない人も多くいます。なぜエリシャは他の人々が持っていなかったことを知っていたのでしょうか。彼は完全に神から離れ、常に神の御前に留まり、神との良好な関係や交わりを何事にも邪魔させませんでした。彼はエリヤを通して神に服従していただけて、服従の道を歩んでいました（私の著書『服従と権威』を参照）。

エリシャはエリヤによって代表される神に従い、その前に留まり続けました。そしてついに主は彼をヨルダン川（霊的には肉または死）へと導きました。彼らがヨルダン川に着くと、50人の預言者の息子たちが遠くから彼らを見守るパノラマが広がり（つまり、彼らが神の動きの一部ではなかったという兆候）、エリヤの持つ神の力が、マントを使って川を分けるという素晴らしい奇跡を起こしました。水を分けるということは、罪深い者、つまりアダムの肉を持つ者と、天の体、つまり魂の体を持つ者を分けること、あるいは肉の歩みから霊の歩みへと離脱することを象徴しています。エリヤとエリシャが乾いた地面を渡ったことは、サタンとこの世の欲望が支配する肉と血から、神の意志のみが成される肉と骨、つまり魂の体への渡りに例えることができます。

彼らが乾いた地（象徴的には肉と骨）に着くとすぐに、主はエリヤを動かし、彼はエリシャに、彼（エリヤ）が連れ去られる前に何をしてくれるのか尋ねました。エリヤはギルガルでも、ベテルでも、エリコでも、ヨルダンでも、彼らが肉から霊へと移るまで、この質問をしませんでした。霊においては、彼（エリシャ）の望みは神の望み通りになり、預言者の子らが邪魔をすることもなくなります。エリヤがエリシャに与えた条件は、彼の心の望みである二倍の恵みを受けることでした。

エリヤの油注ぎの部分が満たされるということは、その意味を理解する者にとっては非常に恐ろしいことです。エリシャにとって、それは果たさなければならぬ大きな課題でした。なぜなら、この油注ぎを受けるまでは、眠ることも休むこともできず、十字軍や伝道などのいかなる計画や宗教活動にも携わってはならないからです。そうでなければ、ギルガルからベテルへ、ベテルからエリコへ、エリコからヨルダンへ、そしてヨルダンから今いる場所へエリヤに従って歩んだ彼の労苦はすべて無駄になってしまうでしょう。主がこれらの聖句で言われたように、エリシャはそれを見逃さないように昼も夜も目を覚まし続けなければなりませんでした。

だから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主がいつ来られるか、あなたがたは知らないからです。しかし、このことを知っておきなさい。もし家の主人が、盗人がいつ来るか知っていたら、目を覚まして、自分の家に押し入れられるのを許さなかったでしょう。だから、あなたがたも用意をしておきなさい。思いがけない時に人の子が来るからです。（マタイ24:42-44）

だから、目を覚ましていなさい。人の子が来る日、その時が、あなたがたにはわからないからである。（マタイ25:13）

エリヤが連れ去られようとしていた時でさえ、エリシャが油注ぎを見逃すような妨害がいくつかありました。エリヤが旋風に巻き上げられる前に、火の戦車と火の馬が現れて彼らを分断しましたが、エリシャは主を見るのを妨げませんでした。彼はエリヤが天に引き上げられるのを見て、「父よ、父よ、イスラエルの戦車と騎兵よ」と叫びました。

その後、彼は自分の着物を取り、それを裂き、エリヤの着物から落ちた外套を取り、

エリヤの油注ぎの二倍の分を受けるまで、辛抱強く耐え忍びました。預言者の子らは油注ぎを受けなかったことに注意すべきです。なぜなら、彼らはエリヤに服従しておらず、また、何をすべきかを知るために神の御前に留まっていなかったからです。エリヤが自らの衣服を脱ぎ、それを裂いたことは、汚れた布切れのような自らの義を捨て去ることに例えられ、エリヤの外套を着ることは、不死である義の衣をまとふことにも例えられます。これこそ、エリシャのように分離し、神とその權威の経路に従う教会が、イエスの二倍の分を受けるために今行うことを神が期待しておられることなのです。

火の洗礼である油注ぎを受け、聖徒たちの携挙の前に王国の福音を宣べ伝えなさい。
彼らは、宗教的なものであろうとなかろうと、あらゆる計画を放棄し、神のために働いてきたあらゆる方法、つまり神と共に働くのではなく死んだ行いを放棄し、最初の愛、すなわち神の御前に留まり、昼夜を問わず見守ることに戻ることが期待されています。それは、エリシャが油注ぎを受けるまで辛抱強く待ち続けた時に力を得たように、神が後の雨、すなわち液体の火を降らせるまで続くのです。そしてこの時代において、神は御霊によって民に明確に語りかけておられます。

さあ、わが民よ、汝の部屋に入り、扉を閉め、憤りが過ぎ去るまで、しばしの間身を隠せ。見よ、主はそこに住む者たちを罰するために、その場所から出てこられるのだ。

地（肉に住む悪魔）の罪惡のゆえに、地もまたその血を現し（肉または肉体は神の意志を現す）、もはやその殺された者を覆うことはない。（イザヤ26:20-21）

その日、主は大きく強い剣（神の言葉）をもって、突き刺す蛇レビヤタン、曲がった蛇レビヤタンを罰し、海の竜を滅ぼす。その日、あなたたちは彼女に歌いなさい。「赤いぶどう酒のぶどう畑（イエスの血によって贖われた教会）」。主であるわたしはそれを守る。わたしは絶えずそれに水をやり、だれもそれを傷つけないようにする。わたしは夜も昼もそれを守る（すなわち、主は教会を守り、悪魔が攻撃しても教会を傷つけないように、絶えず御言葉と真理を与える）。（イザヤ書27:1-3）

神が今、教会に与えた指示は、世の体制から離れ、自分の隠れ家に入り、扉を閉めよ、ということです。隠れ家に隠れ、熱心に祈りながら神の御前に留まり、主が、神の民の肉体を占領し、神の御声を聞き従うことを妨げている悪魔たちを罰してくださるのを辛抱強く待ちなさい。今、神の民に対する激しい憤りが高まっており、いわゆる計画をすべて捨て、自分の隠れ家に入ることに同意する者だけが逃れることができるでしょう。そして神はさらにこう言われました。「自分の隠れ家に入り、神に従うことに同意する者だけが、人間ではなく、神の御言葉によって、傲慢の王であるリヴァイアサンを容赦なく罰するでしょう。」リヴァイアサンは人々に抵抗する大いなる君主です。

神の御心を行うことを激しく禁じている。誰もこの霊の影響から逃れることはできない。だからこそ神は、この偉大な霊の影響に満ちたこの世の体制から離れることを、神の民に求めているのだ。そうすれば、神ご自身がそれを成し遂げることができるのだ。

最後に、割礼の偉大な使徒ペテロ兄弟が言ったように、「これらのものはすべて消滅するのだから、あらゆる聖なる生活と信心深さにおいて、あなた方はどのような者であるべきでしょうか。」(II ペテロ 3:11)

そして私は、神の民にも同じ質問をしたいと思います。神との契約関係にある民に、神がある種の祈りを要求しておられることを知った上で、その契約に入っていない人々が、その契約に入ることを何が妨げるのでしょうか？もしあなたが新しく生まれていないなら、祈りが聞き届けられなくても誰を責めるのでしょうか？聖書にこう書いてあります。「神は罪人の言うことは聞かないが、神を敬い、神の御心を行うなら、神はその言うことを聞いてくださることを、私たちは知っています。」(ヨハネ9:31)

この本
は
非売品

著者について

イボ族の両親のもと、エヌグで生まれ育ったジョン・ダニエルは、1989年に主イエス・キリストの福音のために召され、選ばれました。使徒パウロがアラビア砂漠に移され、そこで肉親と交わらなかったのと同じように、著者も聖霊によって、ナイジェリアのエヌグ市アクプオガ・エメネにある荒野、あるいはアラビア砂漠タイプの農場集落へと導かれました。

彼は神の権威経路に従い、1992年に訓練が終了するまで、神の言葉を彼の中で粉碎することにより、主が彼の肉体を火で焼く厳しい訓練を受けさせられました。

彼は私たちの主の権威の下にある人であり、宗派に関係なく、終末の真理をキリストの体に伝える権威を授けられています。

彼は主の指示に従って旅をし、教会、家庭、教会、個人などを訪問して奉仕します。

彼はメアリー・ブレッシングと幸せな結婚生活を送っており、ティモシー・ジョン（ジュニア）、ベンジャミン・サミュエル、デビッド・ジョセフの3人の息子がいます。